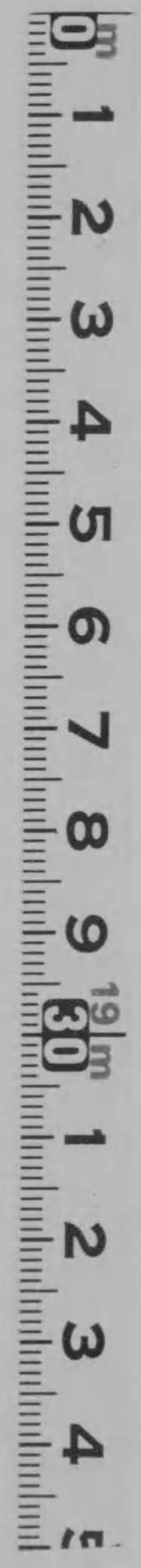


355
80



始



25.11.10

外452

355-80 別

殖民地
總覽內

蒙古

第二卷

外務大臣 本野一郎閣下序文

東京電報通信社長 山川晴月 著

發行所 東京電報通信社

大正 8.16 内交

序

蒙古の地たる今尙近世文化に遠ざかり久しく支那の一藩屏として無爲無力なる王公の統治に委ねられ朝夕喇嘛經典を念誦しつゝ、廣漠たる原野に禽獸を友とする民族の蠢動する外他に見るべきものなく其眞想を闡明すること極めて困難なりとして徒に放棄せらる。案ずるに世界文明の爲未墾の地方を開發し其の住民をして文化の惠澤に俗せしむるは正に先進文明國の徳義上の責務に屬す而して日本

國民は地理上亦人種上蒙古の開發に最適應せる地位にあり。

然るに蒙古の状態に就ては之れを紹介するもの甚尠し今回東京電報通信社長山川晴月氏は茲に時勢の要求に應じて本書を編せらる其の蒙古開發に裨益する所多大なるべき信じて疑はず。

大正六年七月二十三日

子爵 本野 一郎

上頂地高三百二



影撮念紀上頂行一川山員察視蒙滿社本は岡
(月晴川山者著はるて立に央中)

卷 頭

海外發展は國民の輿論なり、帝國の國是なり、二大外征は帝國の版圖を擴大し、我勢力圈亦著しく延長したりと雖ども、年々増殖する五六千萬の人口を移殖するに足らず、内地に在りては生存競争劇しく、中流以下の細民は如何に努力するも奮闘するも、到底向上の途なく、其境遇極めて悲惨なり、此の如き内部の事情は姑く措き、大和民族が海外に向ひて驥足を展べんことは、天定の使命なり、此使命は如何なる事情あるも果さざるを得ず、是に於て南進乎、北進乎問題は數年來有識社會の研究筆舌、論難討査を盡せる所なり、南進を主張する者は南洋諸島が到處富源あり、寶庫横はりて、人の開發を待ち、其天惠地福の隆なる、氣候の凜冽なる北方と比較すべくも

あらず、故に南進は急務なり、況んや世界の大大勢を案ずるに、南洋諸島、南太平洋群島は實に形勝の地にして、列國が必争の處たるに於てをや、と。南進の急務固より言ふまでもなし、現に自然的に有力なる邦人及び出稼人移住民が渡航して、寶庫を開きつゝあり、自今益々渡航者の増進する趨勢なれば、之が誘導亦怠るべきにあらず然ども南進には南進の利あると同時に、之に伴ふ障礙も亦なくんばあらず、北進の方は遼東に我都督府あり、我南滿鐵道あり、鐵道の沿線は勿論、南滿東蒙は既に帝國の勢力範圍に入り、軍隊の駐屯し警察署の設置せらしもの少なかなず、氣候は稍や寒く、地味亦豊饒と云ふ能はざれども、土地平坦にして人口希疎、内地の勤勉にして農事に經驗を有する農民相卒めて移住せば、其勞力は猫額の地を耕作

して徒に競争を事とするに比し、什倍の利あるを疑はず、況んや我大和民族の北方啓發は其天職たるに於てをや、國家の發展は武器にあらず武器は最後の手段なり、眞の發展を期せんと欲せば鋤犁に據らざる可らず、若夫此機を逸せば、折角當局者が支那政府より獲得せる政治及經濟上の利權は全然徒爾に歸して己むべきに於てをや、都督府の滿蒙に關する各般の施設は悉皆閑却せらるべく、南滿鐵道が連年巨額の資金を投じて、講究せる開發手段を水泡に歸せんのみ、故に國家的見地よりして北方の開發は之を等閑に付す可らざるなり。北滿即ち黑龍江省、吉林省は今尙民國の版圖に屬すと雖も、其實は露國の勢力範圍に在り、中華官憲は唯手を束ねて成案を仰ぐのみ、露國が二十年來、扶殖せる勢力は半乎として抜くべからず、殊に東

清鐵道敷設後は線路保護を名として要地に守備兵を置き、以て地方の騷擾を彈壓しつゝあり、名義は兎もあれ、事實は既に露國の領域に屬すといふも不可ならず、然れども南滿は之と異なり、帝國が二十億圓の資財と十餘萬の生命とを犠牲にして獲得したるもの、百戰經畧の地、空しく之を華人に還付せしは我外交の軟弱と拙劣とを事實の上に表明せるもの、我當路者にして今一段強硬なりとせば、滿蒙全部を擧げて之を我勢力範圍に置くこと、至難ならざりしなり當時北京政府は重砲の響、殷々雷の如きに震慄し、如何なる要求をも容納すべき状態に在りたれば、滿蒙の割讓にても拒斥せざりしならん、況んや之を帝國の勢力範圍に加へて、其實權を執るに於てをや、小村大使が好機を逸し、支那をして露人が腰を据えて遼西地方

より動かざるを兵力にて擊攘したる我日本の恩誼を打忘れ、動もすれば、日本は滿蒙を窺偷すと叫び、時に同胞に無禮を加ふるは固より我守備兵を輕視し事端を生ずるが如き遺憾に堪へざる所なり、此の如き行掛りより云ふも南滿と等しく蒙古の開発は實に東洋平和の見地より忽諸に附すべけんや。

茲に予は論難筆舌の時己に過たり、探檢踏査の斷行を企劃す、固より短才淺學、世の所謂優秀異能の目ある先輩と並馳する能はずと雖も、少壯より風塵の間に奔走し、世途の艱難を嘗め盡したれば、體健心壯、如何なる逆境に處するも、元氣益々振ひ、未だ曾て阻喪せず、落膽せず、日夜精力主義を執りて奮闘生活を遂ぐるは、是れ予が平生の本領にして、此の點は何人に對しても譲らざるの自信を有す、今の社

會には才藝あり智識あり、官途に、民間に、各その所長を發揮する俊才に乏しからずと雖も概ね皆自家本位にして一身一家の富貴安逸を貪るを以て畢生の志望となす者比々皆是れなり、予は則ち然らず、報國の精心燃ゆるが如く、國家の爲めには、何時にても生命を犠牲に供して辞せざらんとするもの素志遂に滿蒙の殖民を以て、國家の急務なりと信じ、單身深く未開の郷土に侵入し、風俗氣習より生活状態を精査するなど十分の探查を遂げたり、是に於て歸來東奔西走、團體組織に依りて一大移住計畫を立てたれど、是予が如き一寒生の能く辯ずる所にあらず、然ども予が熱誠は冷却せず、其後幾回も自ら滿蒙の廣原を跋涉し、危地を蹈んで死生の間に入らせり、既にして殖民地綜覽の編纂をなしたるは、朝野の有力者を激勵して、此大事業

に就かしめんが爲めなり、其後予が境遇にも幾多の變遷あり、今は專心一意東京電報通信と大國民との經營に努力しつゝあり、而して百忙の閑を偷んで、此「蒙古」を編修する所以のもの、唯夫れ北邊の拓殖は帝國の天職にして、國家の急務なりと確信すればなり、大方の諸君若し本書を一讀して奮起し、此の一大事業を計畫し給はゞ予の望や足る、而して蒙域の如何に有望なるかは此書を一讀せらるれば了然たるべしと信ず。

蒙古古目次

第一編 總論

史略

第二編 地文地理

一、地勢

甲、山岳

乙、河川

丙、湖沼

丁、沙漠

二、氣候

一

四

五三

五三

五四

五六

五七

七七

八〇

第三編 人文地理

一、住民

甲、人種人口……………八五

乙、言語文字……………八六

丙、住民地……………八六

丁、風俗……………九〇

二、政教……………一四四

甲、行政……………一四四

乙、教育……………一六五

丙、宗教……………一七〇

丁、兵備……………一九二

戊、財政……………一九八

三、物產生業……………二〇二

甲、牧畜……………二〇五

乙、農業……………二二七

丙、鑛業……………二三七

丁、工業……………二四五

戊、獸獵及漁業……………二五四

己、商業……………二五七

庚、貨幣度量衡……………二六九

四、交通……………二八一

甲、道路……………二八二

乙、陸運……………二八五

第四編 各部の狀況

丙、水運……………二九一

丁、驛站……………二九一

戊、郵便……………二九四

己、電信……………二九七

庚、鐵道……………二九八

二九九

一、哲里木盟……………

甲、郭爾羅斯部……………

乙、杜爾伯特部……………

丙、札賚特部……………

丁、科爾沁部……………

二、卓索圖明

甲、喀喇沁部……………

乙、土默特部……………

三、昭烏達盟……………

甲、翁牛特部……………

乙、阿爾科爾沁部……………

丙、敖漢部……………

丁、札魯特部……………

戊、喀爾喀左翼部(喀朝喀爾喀)……………

己、奈曼部…………… 阜新縣……………

庚、克什克騰部…………… 經棚……………

申、巴林部……………

四、	錫林郭爾盟
甲、	烏珠穆沁部
乙、	浩濟特部
丙、	阿霸垓部
丁、	阿巴哈納爾部
戊、	蘇尼特部
五、	烏蘭察希盟
六、	伊克昭盟
七、	喀魯倫巴爾和屯盟(喀爾喀東路車臣汗部)
八、	汗阿林盟(喀爾喀北路土謝圖汗部)
九、	內屬蒙古
甲、	察哈爾八旗

乙、	歸化城土默特
丙、	熱河都統管屬
丁、	錫呼圖庫倫喇嘛旗
十、	移住民開拓ノ狀況
甲、	東四盟
乙、	西二盟
第五編	旅行の所感



第一編 蒙古

總論

蒙古と云ば、朔風凜冽、寒威肌を劈き、四顧蕭條、漠々たる高原、到底文明人の棲息すべき地にあらずと思惟せらるれども其實然らず、氣候溫和と謂ふ能はざれど、人類の生活に妨げなく、古來蠻人の繁殖に適したるは論なく此地方より英雄屢起りて支那に侵入し以て漢人を征服し、遂に海を越えて我帝國に來冠するに至れり。一方には懸軍長驅、東歐までも攻入り、白哲人の肝膽を寒からしめたるほどなれば、此地方の氣候風土が人の身體を強健ならしむることは事實の證明する所なり、地味亦薄瘠ならず、處によりては肥沃と稱すべき地方もあり、原住蒙古人は有史以前遊牧を事とし、牛羊を放牧して其肉を喫し、其革を着け、其乳を飲み、以て飢寒を支ふ、されば茫々た

る曠野、未だ曾て鋤犁の入らざる處多し、牧場としては實に好適なるを以て世界を通じ、牛馬の價格騰貴せる今日、大いに畜産事業を作興せば、巨利あるや疑ひを容れず、況んや牛馬改良の技術著しく進歩し、此途の經驗家事業家其人乏しからざるに於ておや。

農業は蒙古人の賤む所、其風習は遽に更まらず、蓋し彼等は土着耕作の利を知りながら、數千年來遊牧の生活をなし來りたるもの、鋤を執つて土を掘るは耻辱なりと考へたるらし、随つて原始時代より牧草茫茫、生じては枯れ枯れてはまた萌え、以て近代に至りしが、清朝の版圖に入るに及び、英主明君相繼いで出て、漢人を獎勵して開墾に従事せはしめられたれば、漸時拓けて今や天與の沃壤と化したる境域最も廣く、漢蒙人種相混じて耕作をなす様、之を光緒以前の光景に較ぶれば幾んど別様の觀あり。農産の種類を擧ぐれば、土俗サミール（我邦黍の類）ありて、之を炒りて主食とす、高粱は蒙古東部

に於て盛に栽培せらる、是漢人の最も好む所にして、耕地全部の四割に達すと云ふ、大豆は滿洲地方ほど耕作せられずと雖も、其地味に適することは言ふまでもなし、其他大麻の如き、瓜子の如き有利の農産物少なからず、今後若し内地より寒地に適する各種の作物を試作せば、此地方の農業は前途大いに有望なるや論を待たず、勿論地質は善良なれど、氣候寒冷なるを以て、南洋は勿論、内地に比すれば、收穫極めて微少なるも、天然の良地を撰び、人力の及ぶ限り耕作（土地廣く）を以て之に臨めば、彼此乗除の結果、其所得は他の温帶地方に譲らざるも亦知るべからず。

礦物に至りては、未だ専門家の探査を経ざるを以て、其種類産額を確知するに由なし、蓋し、古來造化に嚴封せられて、人間の窺ふを許されざりしなり、然れども近時漢人漸く鑛業を開き、處々に金鑛を採掘しつゝあり、現に熱河附近の如き、數箇所にて舊式の採法を用ひて營業するを見ても、採金

の利益厚きを知るに足らん、露人の經營に係る庫倫方面の金鑛會社は規模も大なり、收益も亦随つて少なからざるが如し、其他銀鑛もあり、石炭もあり邦人にして團體移住をなし、永久的に土着するか、資金を懐にして奥地に入り、各種の事業を起興せば、蒙古がヤガテ日本の勢力範圍にあらで、事實上の版圖に歸するや、疑を容れず、果して然らば北進の急務なる、豈南方發展に譲るものならんや。

史 畧

蒙古の開闢に關しては、文獻の徵す可ものなく、固より其詳細を知るに由なし、支那には夙に文字の發明あり、三代以下の治亂興廢信すべき史實として、歴史に載せらるゝも、接壤の蠻夷に就きては、唯漢民族と接觸せる事情を記するのみ、其盛衰起伏の跡など、何等傳はる所なし、史記の録する所に

據れば、夏段の世既に北蠻の國境外に出沒する者ありしは事實なるが如し、三代の時獫狁葷粥等の名の見ゆるからは此等の種族が時々此地方に出沒したること明けし、人類學者の説によれば、原人は到底蒙古の如き寒威の嚴しき地方に發育するに由なければ、阿爾泰山の西部を経て移住して來りたるものならんと、東亞の民族種之あれども、有史以前西部亞細亞より漸次流れて東方に進み、遂に支那の西部と北部とに足を留めたるものと考へらる、夫の西方が西都たる周室の首府に廻り、歴代の政府その壓力に堪へず、宣王に及び舊都を棄て、洛邑に移り、所謂東遷を執行したるは周室の勢力振はず、諸侯相率ゐて王命に抗することとなりし主因たらずんばならず、西戎の侵寇は東遷に因りて免れたれども、北胡北狄の侵入は猛烈にして漢人の得て防ぎ得る所にあらず、戰國の間、燕將趙將専ら北邊の防禦に汲々たりしは苟くも漢史を閱せる者の知る所なり、趙李牧など奇策を用ひて屢々匈奴を破りしは、戰

國時代に於ける支那の名譽たり、秦は分立七國の中に於て、最も強盛にして他の六國は俱に、抗衡する能はざるほどの勢ひなりしも、北胡の入寇は常に深患たり、始皇帝に及び、蒙恬將軍をして北邊を護りて匈奴に備へしめ、其後世界的大事業たる萬里の長城を築き、以て永く邊患を除かんとしたり、蓋し秦を亡ぼすものは胡ならんと云へる豫言を信じたるに由れり、兎に角秦時代の匈奴即ち蒙古地方の蠻族は勇猛にして平生難艱に慣れ、一晝夜の三分の一は馬上に生活すと稱せらる、隨つて其體力の強健亦驚くべきものあり、之を文化著しく開け、住むに層閣あり、出づるに車馬ありと云へる當年の漢民族に較ぶれば、幾ど年を同じくして語るべからず、例へば猶腐敗せる羅馬人が半裸體の日耳曼蠻族と對抗せるが如くなり。

漢高祖は不世出の英雄なり、部下の勇將猛卒雲の如し而して其強楚を平げたる後、平城に於て匈奴の圍む所となり、進退窮まりて策の出づる所を知

らず、陣平の奇計を用ひ、美人を賂りて厄を免れしは史上に著しき事實にあらずや、匈奴の雄勁此の如くなりしかば、漢室は年々使節を發し、金帛を贈りて邊に寇せざらんことを請へり。是名義は蠻夷懷柔なれども、其實は貢物の獻納に外ならず、以て北狄の如何に強猛なりしかを窺ふに足れり。

斯まで強盛なりし匈奴も、自然の結果漢人の驕奢に感染し、何時となく心身とも衰弱し、漢武帝の時に至りてす、其兵鋒昔時の如くならず、漢の名將衛青確去病等軍を率ゐて長城を出て、屢々單干に遭遇して、大いに之を破れり、獨り李軍は五千の孤軍援なく、匈奴の爲めに散々に打惱まされ、遂に匈奴に降れり、然れども此一舉匈奴の勢力地に委し、左右兩部に分割せられたり、漢武は地を拓くこと數千里、以て外征の成功を誇れり。彼の羅馬衰亡史の著者ギツポンは其書に於て、當時の事情を記し、Vij (武帝) の遠征、蘇武の羊を飼ひし北海は、今の貝加爾湖なることを説き、更に分離せる一部は漢

人に降り、長城に入りて熟蕃となり、後漢の世に及び、他の一部はヒマラヤ山の背後を突破して、羅馬東帝國（今のコンスタンチノブル）の北境多腦河に迫り、羅馬人をしてモンゴリヤ種族の特徴たる平面豆眼たして、骸骨の荒たる韃靼人の襲來に消魂せしめたりと云ふ、（百年前の著述なれば時代の錯誤あり）

長城内に遷されたる匈奴には從來水草逐ふひて轉渉し、所謂テント（天幕）生活をなし來りたるを變更し、開墾拓殖の事に従ひ、漢人の農業法に倣ひしかば、勢ひの趨く所、その氣風從順となり、復た往時の慄悍なるが如くならず、然れども其本來の野性、其天賦の勇猛は數代平和的生活を経たれど、遽かに脱却せず、漢の三國を過ぎ、西晋の末に至り、夫の劉淵石勒の如き英雄此種族より崛起して、鹿を中原に争ひ、晋の都を打破りて、皇帝を生擒し、之に青衣（給仕服）を纏はしめ、宴會の席上酒の酌を執らしめたるは史上稀

有の奇談なり、劉淵は自立して帝と稱し、國號を漢といへり、石勒も亦帝位に即き、後趙と號せり、支那史上五胡夏を亂るといふもの、即ち此時の戰亂を指せり、北魏の拓跋氏は中原則ち江北に蟠踞し、東晋は逃れて江を渡り、金陵（今の南京）に首府を置き、江南半壁の地を保ちたり、所謂南北の分立は茲に基せり。

内蒙古にも殘存して、天幕生活を繼續せるものあり、更に西北方より移住し來れる種族も之ありしが如し、夫の鮮卑、關、烏桓等は交々此地方に發展し、契丹は外蒙古の東部に起り、漸く隆興したるもの、如し。蒙古てふ名稱の起因に就きては、其説區々一ならず、昔時女眞が遼と對抗せし時、遼鐵を意味するとして、自ら國號を金と改稱せし實例に鑑み、其女眞即ち金人と戰ふに當り、蒙古と改稱したり。蓋し蒙古は銀の意義なりと云ふ、而して此説も亦果して當れるや否を知らず、或は曰ふ種族の本據は後貝加爾地方にして

成吉思汗は此地方の滿貫兒と稱する部落に生れたれば、其出生の地名を取つて直に種族の名稱とはしたり、即ち蒙古は此滿貫兒の轉化なりと云ふ、一説として茲に掲ぐ。

一、蒙古及東蒙古の境域

全支那版圖中其の北方に面するは即ち蒙古にして、清朝時代は此方面の地域を一般に北藩部と稱せり、支那本部とは戈壁の沙漠を以て境せられ、其の漠北に在るを外蒙古と云ひ其の漠南にあるを内蒙古と唱ふ。而して外蒙古の西南部にある阿拉善額魯特及び外蒙古の西北部にある唐努烏梁海並に科布多の地點も亦一般に蒙古と概稱せらる、而して其の東蒙古とは外蒙古中車臣汗土謝特汗及内蒙古の全部を指たるものなり、此書の主として説述せんとする所は、内蒙古中の東四盟並に其他の部分即ち西二盟にして察哈爾八旗及外蒙古部及歸化城土默特は之を概説するに止むべし、左に其區別を明瞭ならしむる爲め之を表示す。

是に於て鐵木眞乃ち諸部酋長を敖嫩河岸に會し全世界を統一せんことを盟ひ九旒の白旗を建て軍容を齋肅し、即位の禮を行ひて帝と稱し成吉思汗と號す實に西歷千二百六年宋の開禧二年、我土御門帝の御宇將軍實朝執權の時に當れり。

敖嫩河岸の會に獨り乃蠻部の酋長來り列せざりしかば、成吉思汗大いに怒りて之が討伐に向へり、乃蠻酋長屈出律(太陽汗の子)其部衆を率ゐて遠く厄爾齊斯河上に奔逃せしが、成吉思汗追ひ討ちて之を破る。屈出律の部衆悉く亡び其餘衆僅かに阿拉爾海地方に走り、屈出律も復た僅かに餘衆と共に逃れて、西方亞細亞の強國たる西遼に倚ることを得たり。是に於て阿爾泰山附近一帶の地は悉く蒙古の有となり、成吉思汗の軍は西夏に向へり。當時西夏は内亂のため蒙古軍を防ぐ能はず其王李安全遂に出て、降を乞ひ、蒙古の領地は天山降近より伊犁河の流域一帯に擴張せり。

次に成吉思汗は當時亞細亞の最大強國たる金を伐たんとし其子赤察合臺、窩濶臺を以て游軍とし其弟哈薩爾を以て左軍となし成吉思汗は第四子拖雷と共に中軍となり道を分つて兵を進め先づ西京を抜き臨潢より遼河を過ぎ、頻に諸部を降して遂に居庸關に入り其守將を走らせ、中郡(今の北京)に迫り、河北河東の諸部を略取るや金遂に和を乞ふに至れり。蓋し蒙古兵の一府を略取るや其囚虜を軍前に列して傍近の府を襲ふ、其住民は親戚朋友の敵軍の俘となれるを見て之に抗するに忍びず遂に皆降伏す、如斯して蒙古兵は黄河に至るまで北支那の諸府を攻略せり。其後金は都を汴に遷す、成吉思汗之を聞き怒つて曰く、既に和し而して都を遷すは彼れに二心あるなりと即ち再ぶ金を征し中都陥るれ遼西地方を降し、其將木華黎を留めて征金都督とせり、金は僅かに東黄河を阻て西潼關を扼し以て自ら衛るに過ぎず、黄河以北一帶の地は悉く蒙古の有に歸せり、時に西曆千二百十三年成吉思汗即

位八年なり。

當時蒙古の西方に二大強國あり、西遼(黒契丹)及び花刺子模とす、西遼は遼の宗室耶律大石の創立する所なり、遼の亡ぶるや耶律大石其殘兵を率ゐて土耳斯坦に走り、畏吾爾、花刺子模、篤蘭鄂克薩等の諸國を服し一大國を建て其領土は西藏より阿模河及び西比利亞の西部に達せしもり後國勢衰へ所屬分立するに至り、乃蠻會長屈出律が西遼に投せし時は西遼の勢力既に振はざる時なりしを以て、屈出律の衆を率ゐて來りしを喜び妻はすに公主を以てせしも、屈出律自己の勢力の強大となるに及び西遼を奪はんと欲し、花刺子模の士丹瑪哈默と謀を通じ西遼を挾撃して滅せり、西遼は建國より此に至るまで四世八十八年なり。

花刺子模は其初め關遼に臣服せしも後西方亞細亞の大強國となり、瑪哈默が其國王となるに及びて歲幣を西遼に納むるを欲せず、乃ち屈出律と結びて西

遼を亡ぼし之を分割するに至りしが後、屈出律は成吉思汗の再征に由り遂に滅亡し蒙古の領地は西遼の故土に及び西方花刺子模と境を接するに至れり。花刺子模は當時中央亞細亞の殆んど全體を領し、國勢大に振ふ時に成吉思汗回々教徒に隊商を附して花刺子模に遣はし同國の産物を購求せしむ、花刺子模の官吏其購求せる貨物を奪掠せんと欲し、商賈を捕へて強るに蒙古の間諜なりとして之を瑪哈默に報ぜしかば、瑪哈默乃ち悉く其隊商を殺戮せり。成吉思汗之を聞き大に怒り山上に昇つて禱ること三晝夜、神明の助けを得て仇を報ぜんことを誓ひ先づ使者を使はして瑪哈默の罪を問ふ、瑪哈默又其使者を殺し兵備を嚴にして蒙古軍の來るを待つ、成吉思汗乃ち諸子諸將を集めて大に征西の軍議を凝らし、金山以西の險路を開拓して新に軍用道路を作り、西歷千二百十九年西域に向つて親征し、六十萬の大軍先づ厄爾齊斯河源の地を發し金山を越え沙漠を渡りて陰山に攀ち伊犁河に達し、附近諸城を拔

き是より兵を分ちて四となし察合臺、窩濶臺を第一軍に、朮赤を第二軍に、施雷を第三軍に將とし成吉思汗は自ら中軍を指揮し、直に花刺子模の首府布哈拉を衝く、諸軍向ふ所敵なく哲伯、速不臺の二將は瑪哈默を逐ふて裏海に至る、瑪哈默遂に一小島に脱して窮死せり。成吉思汗更に軍を進めて瑪哈默の子札蘭丁を逐ひ、印度河に沿ふて凱旋の途に上りしが途會々哲伯、速不臺の二將露西亞に進軍して南部露西亞を討平し凱旋するに會す、蓋し二將は既に瑪哈默を討滅して亞細亞に於ける目的を達せしも、更に遠征して波斯を抜き高加索地方を併せ露西亞に侵入し、喀爾喀河岸に露兵と會戦して之を破り長驅して土尻伯爾河を下り、哥力密に入り轉じて裏海の北岸に現はれ稽爾奇斯高原を過ぎ、驅駟縱橫無人の境を行くが如く抄掠を恣にして振旅して還りしなり。

成吉思汗既に西征の目的を達したるを以て更に金を討し、然る後宋を滅せん

と欲し大兵を發して平涼（甘肅省）及び鳳翔（陝西省）に達し六盤山（平涼に在り）に次せし時病に罹り六十六歳を以て曠世の大英雄は空しく一塊の土と化せり。實に是れ西歷千二百二十七年即位二十二年にして我が後堀河帝の御宇北條泰時執權の時に當る、遺屍を起輦谷に葬り廟を太祖と號す、起輦谷は爾鄂多斯右翼中旗西北の阿爾坦山に在り、蒙古遊牧記に曰ふ、内蒙古鄂爾多斯七旗の盟處を伊克昭と名づく、蒙古語に大を謂ふて伊克と云ひ、廟を謂ふて昭と云ふ、伊克昭は則ち大廟の義なりと。

抑も建國の初め極めて小弱なりし蒙古が次第に勢力を張り、各國を併呑するに至りしは、素と蒙古人種の勇猛なるを證するものにして遠く匈奴の先たる山戎獫狁等の種族に屬するものたりとの想像は誤らざるに庶幾し、戎の字は戎を執り盾を携ふる状を示せるものにして以て勇猛の性なるを察すべし、且つ蒙古人をして強力ならしむる所以は尙ほ他に原因在り、蓋し蒙古人は婦人

をして全く家政に當てしめ、男子は内顧の憂なく常に守獵射騎を事とし、其生涯を戰鬪的準備に供したるのみならず、戰爭は寧ろ彼等の快樂とする所なりき。則ち支那本部の人民が文章を喜び軟弱なる遊嬉に人生の快樂を感じるとは全く相反せり、又蒙古の軍は規律號令頗る嚴峻にして上長の命令は絶對的威力を有し違背するを容さず、且つ蒙古軍は一世ナポレオンと同じく敵國の糧に依るの主義を採り、懸軍長驅の時と雖も糧食輸送の不便なきのみならず、連年戰爭を事とするも本國財政の窮乏を訴ふるに至らざりき、斯かる勇悍の軍を以て人を殺すこと五百萬國を亡ぼすこと四十、其版圖の廣大なるは前古未曾有と謂ふべく、即ち其領地は内外蒙古より滿洲及支那の北半部、天山南北路、中央亞細亞の全部、西北亞細亞の一部並に歐洲の幾分に及べり、太祖殂して後第三子窩濶臺位に即き、太宗と稱し同時に此廣大なる領地は四子に分配せられ、即ち太宗は厄米爾河流域地方豐饒の部分を領し長子、求赤

は阿拉爾湖北一帶の地厄爾齊斯河上流附近の地を得、第二子察合臺は西爾河以外天山附近一帶西遼の故土を得、第四子拖雷は蒙古發祥の地即ち和林と敖嫩河源との間の地を得たり、而して斯かる龍大の領地を有する蒙古に於て能く内治の任に當り著々績を擧げたる者は有名なる耶律楚材なりとす。楚材は原と遼の遺族にして元太祖其將木華黎をして金の諸郡を攻め降さしめし時來附せしものなり、楚材身幹長大にして美髯あり、聲洪鐘の如し成吉思汗之を偉とし常に左右を置く、楚材天文地理律曆の學に通じ博く郡書を極む成吉思汗遠征する毎に必ず楚材を從へ星位を占ふて得失を言はしむ、後宰相に擧げられ職に居ること凡そ二十年、能く蒙古人の暴戾を和げ其弊習を矯正せり、元來蒙古は世界の征服を以て其目的とせしが故に、其征略して得たる所の國は之を攻勞ある將士に與へて其勇武を賞勵したるを以て、此等封建諸國の統一は甚だ困難なるものあるに拘はらず、之を統轄して一定の賦税を徵

收するの策を立てたるは實に楚材の効に外ならず。

一、太宗の南征及び歐亞遠征

太宗の二年即ち西曆千二百三十年大に師旅を發して金を征し其堡寨六十餘を陷ぬれ、進んで鳳翔城を圍みて之を降し、更に宋と約し挾して汴京を攻む、金帝汴を捨て、葵州（河南省）に走る時に金主使を宋に遣はし兵食を借らんとし、説くに利害を以てし蒙古との連合を解きて金と結び、以て蒙古に當らんことを勧めし、宋聽かず、遂に蒙古に與みし金を圍みて共に之を滅ぼせり、是れ西曆千二百三十四年なり、太宗凱旋の途次支那の技術家を携へ歸りて、新都を和林地に營めり、和地は突厥以來會長建築の地にして太祖早く此處を占めて志を西方に展べ、其後元朝威武を輝かせし地なるも、現今は砂磧荒涼の地となりて復た遺跡の尋ぬべきなしと云ふ。

太宗既に強大の金を滅ぼしたるを以て、今や自ら大軍を率ゐて宋國、高麗、露西亞等を征服せんとせしが、衆の諫むる所となり乃ち赤求の子拔都を以て征西軍の總督となし、名將速不臺を監軍とし貴由、蒙哥、淵端をして之を輔けしめ、又太宗の子曲出及び胡土虎をして宋に向はしめ、唐古をして高麗を伐たしめんとす、部署既に定まり八年（西曆千二百三十六年）諸軍は厄爾齊斯河源及び阿爾泰山の西に向つて進行し、賓密坡拉延斯克州の地を経て窩爾牙河に達し、轉進して欽察諸部を襲ひ之を略有せり、是より更に倆薩尼を陷ぬれ科羅母那に至りて露兵を破り、進んで莫斯科府（莫斯科府は當時建立後僅かに百年尙未だ今日の如き大都を成さず、頗る小にして防守力なかりしと云ふ）を蹂躪し陣を旋らして當時北露西亞の都會なる烏拉的米爾に向ひ、其都城住民を塵殺せり。是れ實に太宗の十年西曆千二百三十八年にして其當時の慘然たる光景は今尙ほ土人の口碑に傳はる所なり。

翌年拔都が露西亞の舊都幾愛夫城を圍むや大兵雲霞の如く其勢圍府を震撼す
當時幾愛夫は實に南露西亞の大都會にして其美觀は決して今日の比に非ざり
しと云ふ、蒙古軍激戦して守將ドミトリーを擒にして、此より兵を分ち一部
を以て留布林加里西亞を掠し、他の一部を以て波蘭に向ひ、散士米爾を略し
長驅して庫拉古夫を抜き、鄂特爾河を濟り細拉西亞の首府なる布列斯拉弗里
に向ひしが、寨堅くして抜く能はず、轉進して獨逸の十字軍と戦ひて之を破
り、摩拉維亞に侵入し行々放火屠殺を行ひて波希米亞に抵り遂に之を陥
る、是れに於て拔都の大軍は進んで匈牙利を侵し、速不臺、濶端等の一軍匈
牙利屈指の都府なる瓦爾得尹府を燒きて此に進軍せるに會す、乃ち共に進ん
で別悉圖を抜き其住民を屠戮せり（太宗十二年西曆千二百四十年）蓋し蒙古
兵が到る處放火屠殺を行ふは其苟くも畏るべき民族は總て之を絶滅せんと期
したればなり、翌年蒙古軍は多腦河を渡りて匈牙利國中堅牢の稱ある斯多利

峨尼に迫り幾んど之を陥れんとせし時太宗の凶計に接し軍をへ班せり、當
時蒙古兵の勇猛なる向ふ所摧破せざるなく、足跡の到る處悉く蹂躪せられ
其殺戮の殘害を極むるを以て諸國擧つて之を憎むと雖復た如何ともする能
はず、蓋し當時の形勢に於ては全歐洲を通じて蒙古軍の敵に非ざりしを以て
若し此時太宗の計に接せざりせば、歐羅巴全州は恐らくは其の馬蹄に蹂躪せ
られたるや明なり。
其後拔都は再び露西亞に行き、都を窩爾牙の分流阿布都巴の畔に建て之を薩
來と名づけ國を金黨と稱せり世に金黨の汗國と稱するもの即ち是なり、
露國は實に二百數十年間金黨の羈絆を脱する能はざりき、故に金黨の宗教及
び風俗は露國に影響を及ぼせしこと偉大にして、今日に至るまで尙ほ其遺風
の存するものあるを見る可し。

三、憲宗時代の南伐西征

西暦千二百四十一年太宗殂し定宗（貴由）位を嗣ぎしが僅に數年にして没し次で憲宗（蒙哥）立つ其間王位繼承に關する紛擾起りしも、一旦靜謐に歸せり、憲宗の元年皇帝忽必烈をして漠南を統治せしめ、府を金蓮川（直隸省）に開く、忽必烈乃ち隱士姚樞を召して顧問となす、姚樞書を上りて治國の大法を陳べ修身、力學、尊賢、親親、畏天、憂民、好善、遠佞の八目に據り時弊を痛論して救濟策を立つ、忽必烈其言を用ゐる軍政を釐革し實業を獎勵し治績大に擧がる、是に於て憲宗は忽必烈及兀良哈臺を以て兵に將として、大理國を攻めしめんとす、大理は唐代の所謂南詔なり、二將は臨洮より進み山谷を行くこと二千餘里、楊子江の上流なる金沙江に至り進んで大理城に迫りて大に其兵を破りその王を擒にす（西暦千二百五十三年）忽必烈乃ち更に進

んで、吐蕃を攻む、吐蕃は久しき以前より佛教に歸依し、唐時代には使を印度に遣はし高僧を招きしかば蓮華生上師には多くの陀羅尼、秘密宗法を齎して吐蕃に入り、有名なる喇嘛密教の一派を起せり、是より喇嘛の勢力次第に盛大となり、吐蕃王の中其權力を殺がんとして却つて弑せらるる者あるに至り、忽必烈吐蕃に入るや猛虎の群羊を驅るが如く到る處降伏す、乃ち兀良哈臺を留めて尙ほ其附近を略せしむ、喇嘛教の蒙古に入るは蓋し此時に端を開けり、兀良哈臺は又進んで交趾に入り其王を海島に走らす、然れども交趾は暑熱酷烈にして蒙古軍長く此に留まるを得ず、僅に九日にして師を班へせり、時に西暦千二百五十八年なり。

忽必烈の南征と同時に憲宗又其次弟旭烈兀をして西征の途に上らしめたり、此征討には二個の目的あり、一はイスマイル教徒（イスマイル教はマホメツト教の一派なり）を誅滅すること、一はバグダットの亞刺比亞政府を征服する

ことは是なり、當時蒙古の勢威に服せざるものは希臘、埃及、及び亞刺比亞にして波斯地方にはイスマイル教徒跋扈せしを以て憲宗は先づ此等を討平せんと圖りしなり。

西曆千二百五十三年旭烈兀は和林を發し撒麻爾干を経て阿模河畔に出づ、先づ布喀爾を伐ち阿刺汀、克什米爾の諸國を服し波斯地方を略してイスマイル教徒を平け進んでバグダットを圍み西曆千二百五十八年遂に其城を陥れ更に西里亞の諸地方を征略せり、時に憲宗親ら兵を率ゐて宋を攻め、四川省の令州を圍みしが俄に軍陣中に歿す旭烈兀は計報に接して東歸の途に就けり。

四、忽必烈の即位宋の滅亡

是より先き忽必烈は既に淮水を渡り、湖北の鄂州を圍み居りしが宋は賈似道を遣はして之を救はしむ、忽必烈銳兵を以て之を攻むること頗る急なり、賈

似道拒ぐ能はず竊に使を忽必烈の營に遣はし自今蒙古に對し臣と稱し江南の地を割き歲貢を納めんことを請ふ、忽必烈之を許さず會々憲宗の計到り又賈似道の再び切に和議を請ふあり且當時和林の留守たる憲宗の弟阿里哥布喀の諸將に擁立せられ帝位に即かんとするを聞き、腹背敵を受けんことを慮かり乃ち宋の和議を許し、西曆千二百六十年兵を旋らして開平（內蒙古）に至り自ら大汗の位に上り阿里哥布喀と戦ひて之に勝ち都を燕京に遷して之を大都となし開平を上都となし國號を立て、元と號す、之を世祖となす。是より先き宋の賈似道は蒙古に對する屈辱的講和を秘し、上書して諸國の大捷を奏せしかば、宋帝之を信じて大に賈似道の功を賞す、是より賈似道權を專らし朝廷に跋扈す、忽必烈位に即くや直に使を宋に遣はし前約を履行せんことを迫る、賈似道自己の秘密の洩れんことを懼れ使者を捕へて歸國を許さず、是に於て忽必烈大に問罪の師を起し伯顏を以て先鋒となし兵を進む、

此時に於て賈似道は罪を以て其職を免ぜられ、宋は四方勤王の師を招き彼の正氣歌を以て有名なる文天祥の如き其他陸秀夫張世傑等の忠臣ありしも、元の銳鋒に當る能はず西曆千二百七十四年元軍は遂に建康に入り、江を渡りて水陸並び進む、時に文天祥尚ほ主戰論を唱へしも陣宜仲等の一派之に従はずして元に降りしを以て元兵悉く臨安に入り、宋帝泰宗及び理宗度宗の二后を捕へて北に還れり、後ち崖山（廣東省）の役に於て宋は元の大將張弘範のため全く根本的に破壊され、陸秀夫は帝を負ひ海に投じて死し、張世傑は占城に赴かんとして舟覆へりて死し、文天祥は之より先き五坡嶺に於て捕へられたり、宋は國を成せしより十八世三百二十年にして亡びぬ、是れ西曆千二百七十九年、我が御宇多帝弘安二年なり。

蒙古の制に於て帝王たらんとするには先づ『クルルタイ』の決議を要す『クルルタイ』は蒙古固有の大會議にして王府諸將は固より各部の酋長等をも召

集し國家の大事を議せしむ、此『クルルタイ』に於て莊嚴なる即位式を行ひ始めて帝王たることを得、此時大會に參集せる宗族以下一齊に『汝の子孫一片の肉と雖も之を牧場に投じて牛の食ふを拒み得る間、又之を草間に棄て、犬の之を取るを防ぎ得る限り我等は誓つて他家の子孫をして王位に即かしめず』と誓ふなり、太祖崩じ長子次子を措き第三子窩淵臺位に即き太宗となりしは此『クルルタイ』の決議の結果なり、太宗の子定宗も亦此決議に據りて立てり、然るに定宗夭して後ち一般の輿望拖雷（太祖の第四子）、の一家に歸し宗族の重立たる者は慣例を破り正式に據らず拖雷の子蒙哥を推戴し帝位に即かしめたり、即ち憲宗なり、是に於て太宗の子孫及び其宗族に左袒する者之を承認せず、太宗の孫失烈門を擁立せんとして争ひしも遂に失敗に歸し、是より太宗の子孫は長く拖雷の子孫と反目す、憲宗歿し朮亦及び察合臺の子孫は遠隔の地に在るを以て直に後嗣を定むるを得ず、時に憲宗の弟にして

和林の留守たる阿里哥布喀諸將に擁立せられ位に即かんとせしに、忽必烈乃ち阿里哥布喀と戦ひ勝利を獲て衆に推され皇位に上りしも未だ宗族の扮擾を絶つに至らず、其後遂に海都の大亂を生ずるに至れり。
當時拖雷の子孫は東方には支那本部を領して元室を有し、西方には伊兒汗國を有し勢ひ最も強盛なり、又朮赤の子拔都の子孫は欽察を有し其領土は廣大にして歐亞の二大陸に跨り察合臺の子孫は西遼の故土を領して其勢欽察に譲らず、獨り成吉思汗の後を嗣ぎたる窩濶臺、即ち太宗の後はその勢ひ振はざりしを以て同族常に之を遺憾とし機を見て昔日の勢威を恢復せんと謀れり、西曆千二百六十五年太宗の孫海都は世祖の宋と交戦に忙はしきに乗じ、兵を擧げて叛し蒙古の大汗たるべき權利あることを主張す、近隣の諸王國又之に附和して勢ひ猖獗を極む、遂に欽察、窩濶臺、察合臺の三汗國は新に「クリルタイ」を開きて海都を推戴し蒙古大汗と僭稱せり、世祖諸將を遣はして之

を討たせしも屢利あらず、是に於て當時南宋征討中の伯顔を召還して海都を伐たしめ大に之を破る、其後殆んど十年を経て海都は遼東及び金の故土に覇を稱す、世祖又伯顔を遣はして海都和林に扼し、自ら遼東を討平せり、世祖歿して成宗繼ぐに及び海都復た元に攻め入りしも、成宗の姪海山のため邀撃されて大に敗走し道に於て死亡せり、其子臺窩濶家を嗣ぐに及び入朝し三十年來汗位相續に關する争擾止みしも其後窩濶臺家は察合臺家と隙を生じ勢ひ窮して元の武宗に降り、窩濶臺汗國は茲に滅亡せり、此數十年間の争亂に因り大帝國は漸く分裂し元室の孤立を致せり。
世祖即忽必烈の時に於ける元の領土は歐亞の二大陸に跨り、亞細亞に於ては西比利亞の北部印度の南部及び日本を除くの外は悉く其勢力範圍に歸し歐羅巴の東北部も亦其領土となれり。
世祖は自己の直轄地を治むるため一の中書省と十二の行中書省とを設け、中

書省は河北、山西、山東の地を統御し、行中書省は此の中央なる中書省の分遣として各地に置かれたり、又阿母行省を置きて葱嶺以西を統べ、嶺北行省を立て、杭愛山以北を制し、阿力麻里元帥府を設けて天山北路を支配し、別失八里元帥府を以て天山南路を、遼陽行省を以て滿洲及び朝鮮を支配せしめたり。

此時に於て蒙古は又其政治上軍事上の目的のため官道を開き宿驛を設け、又守備隊を置きしを以て旅行の困難大に減じ、西方亞細亞及び歐洲の商人等天山南路を経て來る者多く、或は西比利亞の南部より天山北路を経て和林燕京に來り貿易をなす者陸續として絶へず、之加彼斯及び印度と支那とに於ける海上の交通盛にして江南の泉州福州等は繁盛なる貿易場となれり、斯くの如くにして外國人の貿易或は世界探險の目的を以て支那に來る者甚だ多く有名なる伊太利のマルコポーロ、亞米利加のイブンバッタータ等の支那に遠征を

試みしは此時に在り、マルコポーロは我が日本の名を始めて歐羅巴人に紹介したる者なり、彼れハヘニスの一商人にして其父と共に亞細亞に來り、其敏慧にして且歐亞の諸國語に通ずるを以て太祖に用ゐられ四方に使し、其功に依り次第に拔擢せられ河南楊州の都督となるに至れり、後ち彼れは郷里ベニスに歸り次で軍艦の長としてゼノア軍と戦ひし時、捕へられて獄に投ぜられ獄中其紀行文を草して之を世に公にせり、是れ蓋し亞細亞の事情を西洋に傳へし書冊の嚆矢なり、又イブンバッタータは當時の大旅行家にして、西曆千三百四十二年即ち我が後村上帝の時支那に使し、泉州に上陸して南部支那の各地を歴遊し北京に到れりと云ふ。

蒙古は元來世界的大帝國を立つる目的なりしを以て、他の諸朝の如く人種或は國風の異同を問ふことなく才能ある者は皆之を採用せり、故に蒙古の王朝には或は亞刺比亞彼斯地方の學者、軍人或は伊太利、佛蘭西の美術家、職工

等悉く用ゐられ又歐洲の砲術、天文學、數學、其他各種の美術等盛んに輸入せられたり、宗教に對する態度は回々教徒に向つて壓迫を加へんことなきにあらざれども、一般に言へば自由の主義を採り、耶蘇教の如きも支那に入り随つて歐洲諸國との交際を増し、西曆千二百四十五年には羅馬法王インノセント第四世の如きはプラン、カルピンを蒙古に送り又西曆千二百五十三年には佛のルイ第九世はルブルクを遣はして蒙古の憲宗を和林に訪はしめたることあり。

五、元の衰亡明の興起

元の朝廷には世祖忽必烈以後一人の英主を出さず、帝位は常に權臣の左右する所となり、世祖より數世を経て順帝の時（至元二十七年、西曆千三百六十七年）に至り遂に明の併する所となれり、抑も蒙古が古今未曾有の大版圖を

領有することを得たるは不世出の英雄成吉思汗が軍隊の力を以て之を統制し其繼嗣者として幸ひに太宗、世宗の如き英傑の主を出せしに由る、決して政體制度の力に非ず、蒙古の版圖に歸したる諸國に各々異なりたる制度宗教風俗習慣を有するを以て頗る統一の要素を缺くが故に、一朝其壓力の緩む時は忽ち土崩瓦解せんとするや必せり、英國の如きは諸國異人種を統一すと雖も是れ人の力にあらず、近世の進歩したる制度の力に依りて之を保つのみ、或は蒙古の早く衰へしを見て其原因を王位繼承の不完全に歸し、蒙古が父子相續法を採らずして『クルリタイ』の決議を以て其の繼嗣を定めたるは内部の紛擾を惹起し、瓦解を來たせし所以なりと言ふ者あり、然れども『クルリタイ』に於ては宗族中の力量ある者を推戴して統治者となすが故に、彼の普通相續法の如く其承繼者の賢愚如何を問はず父死して長子之を嗣ぐものと其結果に於て大に異なる所あり、此點より言へば『クルリタイ』の制は遙かに普

通相續法に優り、此制に依りて寧ろ蒙古の強盛を致さしめたるものあるを知らざるべからず、然れども相續法の如何に拘はらず蒙古の如き大版圖は當時に在りて制度の力を以て統一すること難く、英傑の統御者を待つて始めて之を彈壓制御するを得べく、而して英傑の現出は常に望み得べからざるものたることを知らば、英傑の死後其國家の久しからずして破壊に赴く可きは蓋し自然の數なりと云ふべし。

其他蒙古の衰頹を來たせし原因は財政の困難是なり、而して其原因に二あり一は歴代の帝王皇族喇嘛を信ずること甚だしくして之に要する供養費の莫大なりしより、一は連年外征の師を起して巨額の軍費を要せしより來る。夫れ既に此の如き衰亡の原因を存し加ふるに蒙古に征服せられし漢民族は其蠻勇に於ては蒙古人に敵する能はざりしも、其智識技能の點に於ては遙かに蒙古人に優れるものあるを以て、常に機を見て中國を恢復せんと圖りしかば、元

の順帝の時に至り其國力の萎靡に乗じ漢民族は四方に蜂起せり、第一に西曆千三百四十八年方國珍の亂となり、千三百五十一年には韓山等（紅巾賊）の大賊亂となり、次で豪傑朱元璋起りて賊亂を平げ、紅淮一帶の地を占領するや北方、元を攻めて燕京に逼る、當時元は内亂相踵ぎ其統一を缺ぎしを以て防戦の力を有せず、燕京は直に陥り順帝開平府に奔り次で崩ず、則ち世祖國號を元と稱せしより僅かに九十八年にし亡びぬ、是れ西曆千三百六十八年にして我が足利義滿將軍の初年なり、是に於て朱元璋は元に代つて帝位に即き國號を建て明と稱し茲に漢民族は再び其勢力を振ふに至れり、朱元璋とは即ち明の太祖なり。

六、蒙古の復活、元の後裔の繼承

順帝開平府に奔りし時其太子愛猷識理達臘逃れて和林に走り王保々に倚る、

之が爲め元の社稷は纒に一縷の命脈を繋ぐを得たり、乃ち國政を王保々に委し國號を復して蒙古と稱し、漠南漠北を領有し勢威漸く振ひ屢々明と兵を交ゆ、愛猷識理達臘の次子脱古思帖木兒位を嗣ぎ天元と改元せしが、西曆千三百八十七年明の攻むる所となり大敗して其太子天保奴と纒に身を以て免れしに、其臣也速迭兒叛きて脱古思及び太子を殺せり、脱古思帖木兒より五世坤帖木兒に至るまで皆其臣のために殺され、遠族鬼力赤汗位を襲ひて自ら可汗と號し國號を去り韃靼と稱せしも部民之に服せず、是に於て韃靼の酋長阿魯臺等遂に鬼力赤を殺し而して後成吉思汗家の後裔本雅失里を撒馬爾干より迎へ王と爲さんとす、時に明の成祖は本雅失里に對し、文書或は使を以て招撫せしも應ぜず、成祖怒りて邱福に命じて之を討たしめしも却て大敗せり、是に於て成祖親ら五十萬の兵を率ゐて塞を出て本雅失里の軍を敖嫩河岸に破る時に衛拉特の部酋馬哈木なるもの本雅失里の微弱なるに乗じ遂に之を殺せり

(永樂十年西曆千四百十二年) 衛拉特は本と蒙古の一部落にして察合臺汗國の滅亡と共に漸く獨立の勢力を得、外蒙古の西部と天山北路とを占領せり、今の厄魯特は即ち此の衛拉特の聲音の轉じたるものなり。

馬哈木の子脱懼立ちて衛拉特の部酋となるに及び韃靼の阿魯臺を襲殺し、自ら可汗たらんとせしも衆心歸嚮せざるを以て又復た元の後裔脱々不花を迎立せしも其の實權は全く脱懼之を握り其の勢力甚だ熾なり、脱懼死して其の子也先傑驁の資を以て大師となり益々權威を振ひ、脱々不花は徒に汗の空名を有するのみ、明の英宗の初年、也先は使を遣はして明に修貢せしも其禮遇の足らざるを怒り大舉して明に寇せんとし、兀良哈より遼東を侵し宣化府に逼り赤城を圍み大同府に入りて將に燕京に逼らんとす、英宗之を聞き親ら兵を率ゐ出でて土木堡(直隸省)に次せしが、此時明車人馬共に疲れて蒙古の兵に敵する能はず潰敗し英宗は蒙古兵のために擒にせらる、也先乃ち帝を擁

して北に去れり、之を有名なる土木堡の變となす、時に正統十四年西暦千四百四十六年なり、後ち也先明と平和を修するに及び英宗を放還せり、此時に當り明朝は國力大に疲憊し大兵を出すの力なかりしを以て蒙古は益々勢威を振ひ頻に邊塞を侵し、哈密、沙州を掠略し遂に朝鮮を脅かすに至れり、特に也先其王脱々不花と隙を生じ王を殺し自立して田盛大可汗と號せしが後ち也先は衛拉特の知院の攻殺する所となる、時に韃靼の酋長孛來なる者又知院を攻めて之を殺し脱々不花の子麻兒可兒を立て、小王子と號す、是に於て衛拉特の勢力は地に落ち、韃靼の勢力次第に強大となれり、麻兒可兒死し其兄立ちて馬兒可兒吉思小王子と稱す、然れども韃靼の酋長益々權を専らにし其後小王子の廢立屢次行はれたり。

正徳十三年（西暦千五百十八年）小王子阿著死し其兄の子ト赤を以て小王子となす、阿著に三子あり吉囊、俺答及び老把都と曰ふ、吉囊は河套に居り、

俺答は漠北に在り、老把都は宣化府の塞外に駐牧す、三都中俺答最も強く其威名遠近に振ふ、明の世宗の時屢々大同府附近に入寇し、其後明人を得て謀主となし、頻に直隸、山西、陝西の地を侵せり、後ち俺答大舉して古北口に至り大に明兵を破り長驅して懷柔を略し順義を圍み通州に抵り更に燕京に薄る、明軍拒む能はず、蒙古兵焚掠三日にして師を班へせり、是れ嘉靖二十九年西暦千五百五十年なり、此時に當り俺答疆土を開拓すること甚だ廣大にして南は甘肅山西の邊塞に至り北は永邵東は喀喇沁西は鄂爾多斯に達し其富邊疆に冠たり、隆慶四年（西暦千五百七十年）俺答の封爵を受け順義王となる其城を名づけて歸化城と云ふ、四隣平定諸部を約束し復た入犯せしめず、其管下諸部に都督、指揮、千戶百戶等の官を置き又市場を十一箇所を開き以て内外邊民の貿易に便し邊陲是より稍無事なりしも、東部の土蠻は尙ほ抄掠を止めざりき。

七、清の林丹汗討滅、内外蒙古の統一

元の後裔は小王子と赤より四傳して察哈爾林丹汗に至り、其勢力最も強大にして、内蒙古を横行して數々遼東を侵し、又喀喇沁附近を攻破し、勢ひに乗じて宣化大同等の府を侵掠し、時に林丹汗は土默特部に宗族繼承の紛擾あるに乗じ遂に之を奪略し益々横暴を逞しくして諸部を凌壓せり。是に於て小弱の部落之を防ぐ能はず、或ひは漢北に走つて當時の強大部たる科爾沁に投ずるものあり、或は東走して科爾沁に倚り以て難を避くるもの頻々相繼ぐ。其後林丹汗破竹の勢ひを以て科爾沁を襲ふや、科爾沁も亦之に敵する能はず、蒙古諸部に先だち清廷に歸附せり。時に鄂爾多斯部は喀喇沁阿羈垓等の諸部を糾合し、土默特の地に於て林丹汗の兵を破り、勢ひ稍々振ひしも後難を怖れて亦清廷に歸從せり。蓋し鄂爾多斯は當時に在りて内蒙古中の強大なりし

蒙古清朝へ
歸附の嚆矢

ものなり。初め天順年間太祖十五世の孫達延汗の第三子河套に據り鄂爾多斯と稱す。七子あり、各套地を分有し部族繁衍せり、此より河套の地は永く達延汗子孫の據る所となれり。蓋し河套は元に在りては西夏の據る所たり、元の西夏を滅するに及び、西夏中興の二路を置く、三面黄河を以て圍繞し要害の地たるを以て古來此地を占むる者は負隅の勢ひを有し支那の邊疆は常に其苦しむる所となれり。

此時に方り清廷は其の始祖たる滿洲の太祖歿して太宗位を嗣ぎ、既に朝鮮を征服し全力を擧げて明に當りしかば明は内蒙古察哈爾に賄賂を贈りて清軍に當らしめんとせり。是に於て清の太宗は明（明は其後西暦千六百四十四年李自成の自立と共に大體上滅亡せり）を亡ぼすに先だち内蒙古を討平せんとし天聰八年西暦千六百三十四年大軍を率ひて察哈爾は征す、曾て強盛を誇りし察哈爾の林丹汗も之を拒ぐこと能はず、遂に歸化城より黄河を渉りて西奔し

清帝内蒙古
を統一す

青海の大草灘に至りて死せり。翌年林丹汗の子額哲其所部を率ゐて降る、清帝之を親王に封じ四十九旗（後五十一旗となる）の上位に置く、蓋し元の嫡裔なるを以てなり。額哲嗣後傳へて布爾尼に至り奈曼其他諸部を煽動して清に叛す、清帝兵を派して之を討伐し各部の蒙古兵之に従へり、布爾尼連りに敗績し終に科爾沁兵の射殺する所となる、事平ぎて後清帝其故地に牧廠を置き、内務府大僕寺に隸し而して其部屬を宣化大同二府の外に移し遊牧をなさしむ、之を八旗に編制し東西二翼に分てり、是に於て内蒙古の地は全く平定し清國の版圖に歸せり。

清帝既に内蒙古を平定するや外蒙古喀爾喀に戰捷を報じ、之をして來聘せしめ始めて進貢の制を定む、順治三年西曆千六百四十六年喀爾喀の土謝圖汗及び車臣汗は蘇尼特の酋長騰機思が清國に叛きて部屬を率ゐ喀爾喀に投ぜんとするを迎へ、共に巴林部の人畜家財を掠奪して去る。清帝兵を發して之を征

し大いに二汗の兵を破る、其後二汗共に表を清帝に奉じて罪を謝す、是に於て各其子弟を來朝せしめ且つ先に掠めし所の巴林部の人畜を還さしむ。康熙二十三年（西曆一千六百八十四年）に至り右翼土謝圖汗は左翼札薩克圖。車臣の二汗と釁を開ら、連年兵を構ふ、此時に及びては元來勇敢なりし哈爾哈種族も喇嘛教に心酔して漸く尙武の氣質を失ひ、遂に當時慄悍凶暴を以て聞えたる準噶爾の酋長噶爾の襲ふ所となりて大敗し土謝圖、車臣、札薩克圖三汗部共に土崩瓦解して内蒙古に走り救を請ふ、帝即ち倉儲を發し又牲畜を給して之を救恤し且つ暫らく科爾沁の牧地を割與して遊牧せしむ。康熙三十年（西曆千六百六十一年）土謝圖汗具疏して罪を清帝に謝す、蓋し嚮きに哈爾哈全部が準噶爾の併す所となりしは土謝圖汗と車臣、札薩克圖二汗との内訌に由るを以てなり、清帝之を聽許し且つ自ら多倫諾爾に至り哈爾哈の部衆と會し始めて外蒙古の爵位を定む。其後噶爾丹復た清に入寇せしも

清帝伐つて之を滅ぼし漠北全く平定して阿爾泰山以東皆清の版圖に入る。是に於て悉く喀爾喀の地を恢復し三汗部復舊牧に歸るを得たり、其後三汗部に三音諾顏部を加へて四部となす。清朝の蒙古を統一するや爾來漢滿八旗の制に倣ひ、軍政を布き各部落の酋長には王公台吉等綏撫に努め蒙古も亦久しく其威徳に服せしが、宣統帝に及んで清朝滅亡し新たに中華民國の組織せらるゝに至るや、蒙古は再び動搖を來たし霸氣滿々たる外蒙古庫倫の活佛は露國の後援により獨立を宣言し新政府の羈絆脱せんとし、次で露蒙協約となり露支協約となり遂に外蒙古一帯の地は事實上支那の手を離れて露國の勢力下に入りしことは以下篇を改めて之を説かんとす。

八、内外蒙古諸部の始祖

上來叙せし所に據り之を約言すれば、内蒙古諸部は清國に歸從せるの最も早

きものたり、而して明の末年元の察哈爾林丹汗其強盛を恃みて内蒙古に跋扈するに方り内蒙古の小部落は其壓迫に堪ふる能はず、或ひは遠く沙漠を踰えて喀爾喀に投せしもの少なからずと雖も、近く東奔して科爾沁に頼れるもの亦甚だ多く以て察哈爾の銳鋒を避け纔に其部落を全ふせしものなり。科爾沁は早く既に清に歸附して後復紛擾を起さず、察哈爾は林丹汗亡びて其子額哲親王に封ぜられ其他諸部も亦舊牧に歸り後布爾尼の清に叛くありしも直ちに平ぎ彼の外蒙古の叛服常なく長く清の憂患をなせしとは其軌を異にするものあり、故に清の天聘以來著るしき變化を見ざるなり。

今少しく溯りて内蒙古の推移沿革を釋ぬれば、初成吉思汗漠北に崛起し破竹の勢ひを以て諸部落を擧破し、四方を席捲して未曾有の大版圖を成すや諸駙馬等を分駐して各其封土を守らしむ、而して成吉思汗の仲弟哈薩爾兄に従ひ西征北伐功最も多く優封を受く、第四弟諤楚因季弟勒格圖亦功を以て封

ぜらる、内蒙古の科爾沁、札賚特、杜爾伯特、郭爾羅斯、四子部落、茂明安、吳喇忒の八部は哈薩爾之が始祖たり、而して翁牛特は則ち諤楚因の裔にして土默特右翼は太祖十六世の孫阿爾坦の裔なりとす。

此等の諸部は概ね明朝の初めに當り外蒙古より内蒙古の地に移牧し屢々明の邊塞に冠せしも、當時明は新興の勢ひを以て其野心を逞しくすること能はず反つて明兵のため破られ外蒙古に遁逃せしこと一再に止まらず、然るに明の中葉に至り其國勢の衰退に乗じて又復内蒙古に轉徙し牧地を分領して各々部落を形成せり。

此時に當り喀爾喀達延汗の子圖魯博羅特、阿爾楚博羅特、諤齊博羅特、巴爾蘇博羅特の四人外蒙古より内往し獨り季子格埒森札賚爾仍ほ故土に止り以て喀爾喀國を成す、即ち土謝圖、車臣、札薩克圖三部部の始祖なり、是に於てか達延汗の裔分れて内外蒙古の二派となれり。達延汗は即ち元太祖十五世の

孫なり、初め元の順帝明に攻めらるゝや潰敗して北に奔りて死し、其太子愛猷識理達臘和林に逃れ以て纔に元室を保つを得、傳へて達延汗に至りしなり以上内徙せし達延汗の四子は即ち今の敖漢、奈曼、巴林、札魯特、浩齊特、克什克騰、烏珠穆沁、蘇尼特、鄂爾多斯及び喀爾喀右翼の始祖なり、故に内蒙古に於て元裔に非ざるものは、唯だ喀喇沁及び土默圖左翼のみ、即ち太祖の功臣濟拉瑪之が始祖たり。

以上内蒙古諸部は皆天聰八年（西曆千六百三十四年）清の太宗察哈爾林丹汗を征服せし時先後相繼いで封爵を與へられ舊土を領するに至れり、外蒙古喀爾喀三汗部は康熙三十五年（西曆千六百九十七年）清の聖祖噶爾丹を征服せし時其の舊土に復せるなり。

三、位置面積

東蒙古は支那本部の東北滿洲の西部に位置し、北緯四十一度の長城外面より同五十度十分の露支國境の買賣城に至るの東經百〇二度抗愛山の分水嶺より同百二十六度の松花江流域に達す其面積約七萬五千方里あり。

四、疆界

北は肯特山を以て露領西伯利亞に接し南は長城を限り支那本部に界し、東は松花江及柳條邊牆を以て滿洲と境を分ち西は張家口外より阿爾泰軍臺路を界線とし外蒙古喀古喀部を斜めに横斷する一線を以て分界とす。

因みに東蒙古なる地理的若くは政治的固有の名稱あるにあらず、單に記述の便宜上に名づけしものなるを以て従つて西方蒙古に對して確然たる分界を附し難きも假りに本文の如く分界線を定む。

第二編 地文地理

一、地勢

蒙古は廣漠無邊の平原にして大嶺長流其間に介在し四周海岸を距ること遠し戈壁の大沙漠は此疆域の中央に横はり、西北土謝圖汗部の南境より車臣汗部の南半を占め、内蒙古錫林郭爾盟の大部を過ぎ、克什克騰旗に入りて興安嶺に遮られ殆んど盡くるも其餘波遠く西喇木倫流域に沿ふて昭烏達盟及科爾沁各旗に亘り、遼河及松花江流域に至りて盡く、延長數百里殆んど全面積の二十分の一を占め、一帶の地を不毛ならしむ、然れども此沙漠は大部分疎らなる草を以て覆はれ處々肥沃なる平坦地ありて眞の白皚々たる砂磧地は甚だ多からず。戈壁の西北部外蒙古の庫倫附近は山岳に富み従つて多くの水流あ

あり皆北流して貝加爾湖に注ぐ、此等の水流に沿へる平野には佳良の牧草を生じ、亦多少の耕地もあり。戈壁の南方即ち察哈爾より赤峰、朝陽、小庫倫法庫門等に跨がる一帯の地方は羣峰起伏水流に富、耕牧共に盛なり、又其東方各地は廣漠無限の平野にして、遼河嫩江及其支流ありて農業甚だ盛なり。

イ甲、山 嶽

東蒙古の山系は二大脈を以て組織せらる、其東に位するものは南方陰山々脈に起り、北緯四十四度東經百十八度に中る西喇木倫河の源上に蟠屈して海喇喀山、活潑多山等の諸山となり、其脈東南に延びて喀喇沁、土默特、翁牛特等の各部に綿亘し、老哈、大凌、濼河等の水源を爲し其東北に赴くものは克什克騰、巴林各部より烏珠穆沁及科爾沁の各部を経て黒龍江省に入り、其北端伊勒呼里山脈に連る、之を内興安嶺山脈とす。此大山脈は蒙古東部の脊梁

陰 山

をなし、之より大小幾多の支流を分岐し又幾多水流の分水嶺を形成す、其西北に位するものは即ち阿爾泰山より延いて東蒙古の西北境土謝圖汗部の地に入り、抗愛、肯特等の諸山脈を分派し露支國境を東方に進み、其間色楞格、土拉、鄂爾坤、克魯連、敖嫩等の諸水を生じ、蜿蜒起伏して露領に入り、雅布諾魯（即ち外興安嶺）山脈と接続す。陰山は一に大青山と名づく、河套の北烏喇武旗の西境より起り、北走して喀ト特兒山となり、東北に轉じ東に走り烏喇旗の北部及毛明安、喀爾喀右翼二旗の南部に綿亘し、又東北して四子部落の東南に至りて色爾貝山となり、益々高峻を極め、更に東に偃延し察哈爾、牧廠を歴て都蘭山得爾山となり、外倫諾の北を繞り、克什克騰旗の西に至り海喇喀山となり、興安嶺に連續し、更に東南して蝦蟆嶺、太衍嶺、金霸嶺の諸山となり翁牛特、喀喇沁二旗の間に蟠旋す、是より敖漢に奔り老河水源の明安山となり、更に東北に轉じ大凌

河の水源を爲し奈曼、喀爾喀、敖漢等の諸旗界に蜿蜒す。山脈は甚だ延大にして河套の北より起り斜めに盛京邊牆に達し北は沖漠に横障し延長殆んど數百里に亘り幅員往々數十里に達す、群峰の高さ海拔三千尺に達するものは稀なるも、傾斜急なるを以て斷崖崎嶇攀登し難き所少なからず、従つて此山脈を通ずる道路の不良なること東蒙古中他に其比を見ず。

大興安嶺は地方により其稱呼一ならず、蒙古人は之を「ハンタバ」或は「アルトンハンガ」又は「アラヘン」とも云ふ、陰山山脈の蟠屈せる圍場内の海喇喀山に起り西喇木倫上源を東北に奔馳し東蒙古の東哲嶺部を南々西より北々東に向つて縦貫し、默爾阿爾噶靈圖山、喀拉損山、蘇克蘇兒山、等幾多の支脈を分派して遂に黑龍江省界に入る、此山脈は内蒙古に於ける分水嶺たるのみならず、地勢上滿洲及び蒙古の天然的境界を作成す。此山脈より出て、東流するものを西遼河の諸源及卓爾洮爾等の江漱支流とし西流するものを、

喀爾喀、錫林郭爾等の諸川とす、其他東西の溪間より流出する小流にして或は滯して池となり、或は流れて沙中に没するもの亦頗る夥し。

東蒙古の地理の未だ世に知られざるや、大興安嶺と云へば直ちに峰巒重々太古の森林鬱茂、東西の交通全く遮斷せられつゝあるが如く連想するも、事實は之に反し其最高部たる克什克騰旗附近に於ても海拔四千呎内外を出でず、森林の鬱蒼たるものは黑龍江省に位置し蒙古部に於ては連山悉く草を以て覆はれ、谷間偶矮少なる針葉樹を見るのみ、科爾沁の北部に至りて樺柏等の稍大なるを見る、峰頂は一樣に波濤澎湃たる形を爲し、群峰の比高は百乃至三百米突の間を上下し傾斜概して緩漫にして人馬の攀登を妨げず、又所々車輛を通ずるを得、山の東側は西側に比し稍々急峻に北方より南方に進むに従ひ、次第に傾斜の度を加ふ、而して其幅員は高度に反し北するに従ひ漸次擴張す、即ち克什克騰に於ては僅かに十里内外に過ぎざるも、巴林、烏珠穆

沁部に至れば擴大して三四十里となり、更に索倫界附近に於ては七八十里に達す、嶺の西側は高原を爲し氣候寒冷現今殆んど利源の開拓すべきものなきも、其東側及東南方は無限の平野を爲し頗る有望なる未開墾地多し、嶺を東西に貫ぬく數條の車輛道は各部落を連絡す。

肯特山は東蒙古の西隅に蟠居する高大なる山彙にして雅布諾魯威山脈の南端たり、其高度五千尺に達し、漠北の一大分水嶺をなす、其山脈を分つて二となし土拋河源を小肯特、克魯倫河源を大肯特山と爲す。

抗愛山は唐努山脈の東幹にして東蒙古の土謝圖汗部と賽音諾顏汗部との境上に連亘す、其山梁は色楞格河源より起り鄂爾坤河源に達し更に同河及土拉河等踰えて大興安、肯特の諸山と連續し、西は庫々嶺より北折し色楞格河の上流諸水源地を還繞して露領後加爾州界に到り、南方又一支脈を分岐し。鄂爾伯吉、瑪喇噶、都蘭の諸山となり、峰巒起伏頗る雄大なり、抗愛とは譯して

橐駝と云ふ其山伏に依り名づけたるものならんか。

人乙河川

松花江 一名混同江と云び土人は吉林河又烏拉河とも云ふ、内蒙古混向羅斯前旗の東境を還流すること二十餘里、吉林省と蒙古との分界を爲す、其支流には伊通河、伊勒門河、烏蘇圖河等なり。

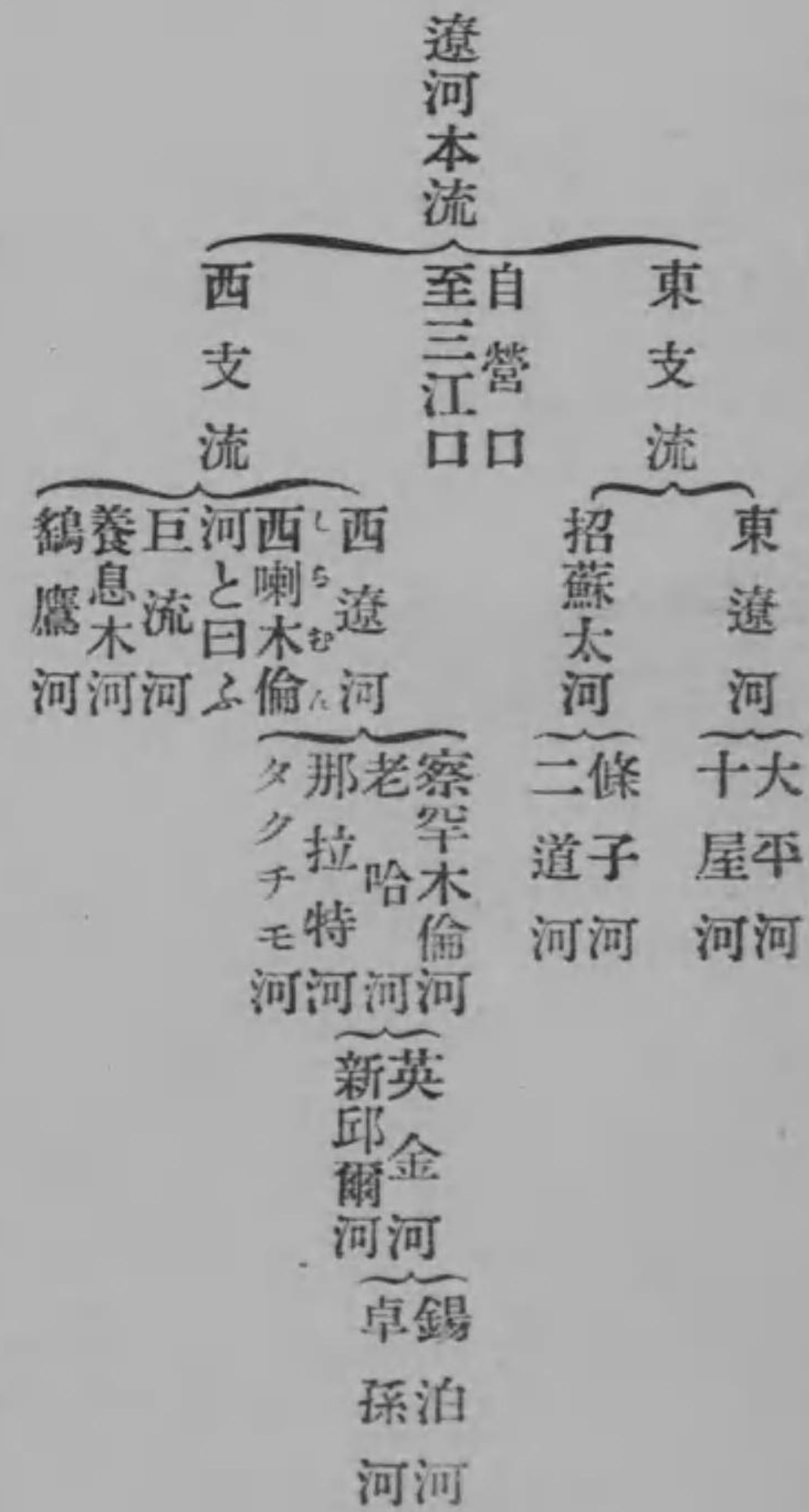
嫩江 一に嫩泥江と云ふ、源を大興安嶺の伊勒呼里山の西南に發し東南流し墨爾根の北に至り南折し、齊々哈爾城の西端を流れ、内蒙古牡爾伯特部に入り東南流して三江口に至り松花江に合す、延長百七十餘里河底概ね泥沙にして幅五六百米突水深平均五尺乃至八尺渡船の備へあり、陰曆四月の頃解氷季節に於て約十數日間江水俄に暴漲す、土人之を桃花水と稱す、又陰曆六月の雨季に於ては河水兩岸に横溢するを常とす、支流頗る多し。

遼河 リヤオ は東蒙古の東部及滿洲の西部を流る、大河にして二源あり、一を東遼河とし一を西遼河とす、兩流三江口の北方に於て相會し南流し小劄子の北方に於て招蘇太河を會し更に東南に折れ通江口に於て邊牆内に入り鐵嶺附近に於て清水河、鐵嶺河（柴河）范河等の諸川を合せ、西々南に轉し牛莊附近に至り、奉天遼陽方面より來る諸水を合し營口に於て遼東灣に注ぐ、其全長殆んど四百里に達し上流は流速稍急なるも下流は概ね坦々たる平野を流れ、堤防なく只自然に任するを以て兩岸の土地は常に異動す、河幅は廣狹一ならざれど、遼源州（鄭屯家）附近に於て五六十米突より百米突の間にあり、滿洲に入りては平均百乃至三百米突を保ち營口附近に於ては擴大にして七八百乃至千米突に達す、水深は季節に由り異れども遼源州附近に於て普通約四尺通江口より下流は五六尺より丈餘に及ぶ、往々にして淺瀬あり、爲めに大船の航行を妨ぐ、營口より通江口に至る間は稍大船を通ずるも、通江口より三

江口に至る間は八十石以下の小船にあらざれば通ぜず、三江口以上は航運の便なし、營口より三江口に至る約百五十里なり。
遼河は一年中殆んど半季は結氷するを常とす、毎年十、十一月頃結氷し四五月頃解氷す、又遼河には一の橋梁なく只遼源州より下流處々に渡船の設けあり、沿岸は廣大なる肥沃地なきにあらざるも、年々上流より排泄し來る砂礫の爲め往々沙漠地に化せる所あり、且河水年々減少するの傾きありて輓近甚だしく同河の價値を減少せる感あり、將來上流各地に植林を爲し多少開墾の工を施さば俄の増水を防ぎ大いに水利を増大するを得ん。
左に東蒙古に於ける同河の支流を表示す。

大凌河

大凌河 は上流を敖木倫河と稱し三源あり喀喇哈左翼旗の建昌縣下より出づ、其一は松嶺山脈中の努魯兒虎嶺中に發源し東北流して威遜圖山の東を流れ錫喇哈達圖山の間を過ぎ三臺小營に至り、次は建昌の西南平泉の東北にある楊樹梁と稱する分水嶺の東麓に出て東北流し建昌の南端に於て建昌の北方



熱河湯より來る第三の源流と合し東流し三臺小營に至り第一源流に會し大凌河の名を得、東北流し朝陽に達するの間大小幾多の支流を合し朝陽城の南端を過ぎ更に東北に向ひ九關臺門の北方に至り黑海子河を合し東南向し義州の西方河心附近に至り河孟著しく擴大し所々三角洲を爲し義州城北端を流れ小庫倫の南より流る、荒河と會し南向し、錦州の東方十里許に於て京奉鐵道を横斷し遼東灣に注ぐ、全長約百餘里義州に達するまでは山地を經過するを以て水勢甚だ急速なるも其下流は稍緩なり、故に上流より運搬する砂礫頗る夥しく、義州下流に於ては數々沙地を出現するのみならず、其海に運出する沙量亦年々頗る多く河口附近は年々淺瀬に變ずと云ふ、河幅は義州に於て約二百五十米突所々に沙洲あり水流は絶へず其位置を變し或は廣く狭く水深亦所に依りて一ならず時に三四尺に達することあり全く舟楫の便を缺く、其支流としては荒河（一名細河）、里城子河、和爾圖河、僧機圖河、賽固臺河

神水河等を主なるものとし其他小谿流に至つては枚舉に遑あらず。

濼河 は獨石口外の東北約二十里牧廠界内の巴顔圖古爾山より發源し西北し獨石口廳内を経て二十五里許にして多倫諾爾廳界に入り北流して復た東北し舊開平城南を経て上都河と稱し又折れて東南流し柳條溝に至る約六十里始めて豐寧縣内、察哈爾鑲黃旗の境に入り南流して僧機圖汛の東に至り又南向し大廟灣に至り東し山谷の間を屈折東南流し、韭菜梁を経て又東流し正白旗の境を過ぎ鳳凰山を経て郭家屯の東北に至り小饒河を會し南折して大對山の側より東向し更に更して北店子に至り鑲白旗の境を過ぎ南流し興隆莊を経て張博灣の北に至り興州河に會し東折して小營子に至り伊遜沿伊瑪圖河の合流に會し遂に喀喇河屯行宮の北を繞り東流又東南して石門子に至り之より承德府の境に入り東流し下營子に至り熱河を合せ南折して上板城を経て白河口に至り前白河及老牛河を會し、更に東南流して下板城を経て柳河口に至り柳河

車河を會し東南流し門子哨に至り平泉州の西境に沿ひ黃花川、清河、豹河を會し潘家口に至り長城内に入り更に南流して永平府に至り青龍河と合し濼州に於て勃海に注ぐ、此河は古の濡水にして其水清明にして深く、河口より濼平に至るの間舟楫の便あり、延長三百八十里曲折甚だしく全流殆んど山間を流れ斷崖崎嶇頗る山水の景に富む、濼州より上流濼平に至る間十二石積の小舟を溯航し得、河幅七八十米突水深三四尺兩岸平地甚だ少し。其支流の最大なるものを熱河とし、其他庫爾奇勒河（一名小濼河）錫喇塔拉河（一名興州河）、伊瑪圖河、伊遜河、前白河（亦乾白河と曰ふ）老牛河、柳河、車河、黃花河、清河、濼河及瓜地溫泉等あり。

熱河 は三源あり一は圍場の東南界、察罕陀羅海の西固都古爾十倫の南方より出て、熱河行宮の東北三十里にあるもの之を西源と爲す、一は平泉州内の喀喇沁右翼旗の西境默沁達巴罕西の玳瑁溝より出づ、其他の一は喀喇沁右翼

の西南境にある霍爾霍克達巴罕の西方三道溝より出づ之を東源とす、三源合して西南流し黄土坎行宮及釣魚臺行宮の東を経て又西南流し避暑山莊の東行宮内を環る温泉あり流出して之に注ぎ始めて熱河と名づけ南流し下營子に至り灤河に入る即ち古の武列水なり。

白河は源を獨石口外瑪尼圖達巴罕より發し南流して獨石口に入り赤城堡を経て東流し再び長城外に出て判官渡に至りて樂平縣の西境に入り東流し、湯河口に至り湯河を合せ南流し石塘口關に於て長城内に入り東流し、密雲縣を過ぎ潮河を合し通州天津を過ぎ太沽に於て渤海に注ぐ、全長百餘里通州より下流舟楫の便あり、特に天津太沽間は船舶の往來最も頻繁にして春夏の候は常に帆檣林立せり（白河の大部は直隸省内にあるを以て之を略す）東其の蒙古に於ける支流は湯河、水滸河、白馬關河、馮家峪河、鞍子嶺河、七度河（俗に依度河）潮河として潮河最も大なり。

克魯倫河（一名驢駒河）は源を肯特山脈の西南麓より發し衣魯河を併せ西南流し即龍河を會し、更に西南流し全布塞山の東南麓に至り撒内河畢爾喀嶺の西麓より來り會し更に東南流し上喇色欽の東麓より來れる白勒宜河を會し西南流し噶拉太嶺の山間より屈折し、巴彥烏蘭山の西麓を過ぎ東南し僧庫爾河沙磧の間を隱見出沒し來つて之に注ぐ、其れより東流し拖諾山の南麓を経て車臣汗旗の境に入り東北流し、克勒和碩山の北麓を通過し塔爾河を會し厄窩得哈爾哈小山の西北麓を経過し沙漠の間を東流し庫魯諾爾に至り南流し、珠爾呼珠山の南麓を過ぎ庫魯鄂搏の南東より西拉得克西博格山の北方を経て東流す、此附近河中往々沙洲を現す、土人之を木爾呼木と曰ふ、更に東北流し塔本陀羅海山の北麓を過ぎ、東に流れ更に東北流し、固爾班包霍特山の西より東北流し、哈牙巴山の東南に横はる、呼倫池則ち（達賴諾爾）に注ぐ、河源より河口まで凡そ四百餘里車臣汗部の中央を横斷せり。

河底淺く流水常に少く中間沙漠地帯を通過する際流水過半は沙中に暗没し上流より下流は反つて水量少ききの奇觀を呈す、其湖水に入るの前に於て五條に別れ、平時は僅かに水を湛ゆるに過ぎず故に單に河口の現状のみを見るものは其數百里を流るゝ長流なりと想像する能はず舟楫の便は全く之を缺く河中魚を産するとも蒙古人は魚獲の利を知らず反つて外人の利する所となる。

喀爾喀河 は黒龍江省と外蒙古の境界を流るゝ清澄なる小流にして源を興安嶺中の特爾根山中に發し上流數條あり、其本流と見るべきは阿魯他拉奇嶺の西麓達爾彬池（蒙古人之をアツサンと稱す）より出づ、同池は周圍數里山間に在る清澄の小池にして附近の山麓より自然噴湧する多量の水を有し、西南に流れて河を爲し數多の少流を合せ十數里にして特爾根河と會し、山間を屈曲して更に數多の溪流を合せ、車臣汗境に入り訥墨爾根河と會し西北流し車臣汗左翼前旗より來る喀爾喀河に會し、茲に始めて喀爾喀の名を得進んで左右の小溪流を合

せ常に滿蒙の境を爲し、千乃至二千米突の谷地を形勢して北々面向し貝爾池に入る、河口を去る七八里の間は廣漠たる豐沃の平野を流れ下流三條となる全長約七十里其分岐前に於ける河巾約五十米突水深二尺乃至四尺水速急に河底は砂礫なり。

河口に喀爾喀廟あり、車臣汗部中右旗の札薩克多多羅郡王の修する喇嘛寺なり、此寺の附近は一眸千里の沃野にして加ふるに喀爾喀河は貝爾池と共に有名なる魚產地として將來有望の地區たり。

此河源は興安嶺の中梁に於て洮兒河の源と僅かに里餘を隔つるのみにして兩源の間にある分水嶺も亦甚だ峻峻ならず、伯都訥以西の蒙古人が庫倫參詣街道は即ち之にして北部滿洲より外蒙古方面に出づる通路たり、此河は上流に於て鬱蒼たる深林を有し、且河の兩岸高地麓より絶へす多少の湧水あるを以て、四時共に水量多く且清澄にして飲料に供すすべきを以て沿岸の地住民

烏順爾河

比較的^{ひかくてき}多し、之^{これ}を克魯倫河口^{かこう}の水量^{すいりょう}に比^ひすれば數倍^{すうばい}の多量^{たりょう}なり、此河^{このがほ}も亦急流^{またきゅうりゅう}なるを以^{もつ}て上流^{じやうりゅう}より砂礫^{さだ}を運出^{うんしゅつ}すること少^{すく}なからず。

烏爾順河^{うるじゆんが}は貝爾湖^{べいほこ}の吐出口^{とでぐち}にして貝爾湖^{べいほこ}は喀爾喀河^{かきんが}の水^{みづ}を受け、此河^{このがほ}に依^より湖水^{こすい}を吐出^{としゅつ}す、吐出口^{とでぐち}は貝爾湖^{べいほこ}の北岸^{ほくがん}にありて喀爾喀河^{かきんが}と西方里許^{せいほうりきょ}を隔^へつのみ、而^{しか}して喀爾喀河^{かきんが}の湖水^{こすい}に注^そぐ所^{ところ}には、古昔^{こせき}より幾回^{いくわい}か河床^{がしやう}を變^{へん}じたる無^む數^{すう}の河跡^{がせき}ありて烏爾順河^{うるじゆんが}は恰^{たが}も喀爾喀河^{かきんが}の分流^{ぶんりゅう}の一つ^{ひとつ}が北流^{ほくりゅう}するにあらざるかを疑^ぎはしむ、流水^{りゅうすい}は頗^{すま}る緩慢^{くわんまん}なる傾斜^{けいしゃ}を以^{もつ}て達賴諾爾^{たらいのゑ}(即^{すなは}ち呼倫湖^{はるんこ})の東側^{とうそく}に注^そぐ、全長^{ぜんぢやう}三十里^{さんじり}貝爾湖^{べいほこ}の吐口^{とこう}に於^おて幅員^{ふくえん}十米^{じふまい}突水深^{とつすいしん}二尺^{にせふ}乃至^{乃至}三尺^{さんせふ}河底^{かてい}泥土^{どど}たり、全流^{ぜんりゅう}坦々^{たんたん}たる平野^{へいや}を流^{なが}れ河水^{かすい}混濁^{こんだく}なるも兩岸^{りょうがん}には游牧^{いうぼく}民^{みん}の住^するあり。

敖嫩河

敖嫩河^{おのんが}は即^{すなは}ち黑龍江^{こくりやうが}の上游^{じやうげん}にして完水^ま又^{また}烏垣水^いと曰^いひ金元明時代^{きんげんめいじだい}の斡難河^{おんなんが}なり、軍臣汗部^{ぐんしんあなぶ}東路^{とうろ}中^{ちゆう}右翼^{うよく}旗^{はた}内^{ない}忒爾勒^{ていれ}吉嶺^{きちりやう}の西北^{せいほく}小肯特山^{せうこんていざん}の東麓^{とうろく}に出^いづ、曲

色楞格河

折東流^{せつとうりゅう}し大肯特山^{たいこんていざん}より出^いづる啓查魯河^{ちやんろが}を會^あひ、東南流^{とうなんりゅう}し畢爾喀嶺^{ひるかたが}より來^きる巴拉喀河^{ぱらか}を會^あひ又^{また}東南流^{とうなんりゅう}し公古爾特河^{こんくるてが}を容^いれ、呼碼拉堪河^{こまらたか}を併^あせ東北流^{とうほくりゅう}し阿興河^{あきんが}を會^あひ科勒蘇河^{かろそが}を入^いれ東北流^{とうほくりゅう}し集爾渾河^{じゆるほんが}、布裕克圖河^{ふよくくとが}を合^あせ又^{また}東北流^{とうほくりゅう}し克魯河^{くらが}、特倫河^{とるんが}、塔爾巴集河^{たるとはじが}、圖魯河^{とろが}、塔爾河^{たるとが}、額克爾河^{おくらが}、鄂拉河^{おらが}、阿古河^{あこが}、博爾集河^{はるじが}、圖爾格河^{とるまが}、温都河^{うんどうが}を合^あひ東流^{とうりゅう}して黑龍江省^{こくりやうが}に入る、其河源^{そのがげん}より蒙古^{もんこ}内地^{ないち}を流^{なが}る、間約^{まやく}二百餘里^{にひやくじゆり}なり。

色楞格河^{せれんがが}は賽音諾顏汗^{さいいんだくえんあな}、土謝圖汗^{どせつとあな}の二大部^{だいにぶ}落及^{らくが}露領^{ろりやう}西比利亞^{せいひりや}に跨^りり流域^{りゅういき}闊^{くわん}大^{だい}東蒙古^{とうもんこ}河川^{がせん}中^{ちゆう}の第一^{だいいち}と稱^{なづ}す六源^{りくげん}あり皆^{みな}杭愛山系^{かうあいざんけい}に出^いづ、其北^{そのきた}にあるものを哈喇台爾河^{はらたいるか}、布克誰河^{ぶくしゆいか}とし、其南^{そのみな}に在^あるものを左得勒河^{さとくれが}、齋老圖河^{ちやうらとが}、烏里雅蘇台河^{うりやそたいが}、阿濟拉克河^{あじらくが}とす、南北西源^{なんぼくせいげん}合^あして一^{いつ}となり始め^{はじめ}めて色楞格河^{せれんがが}と稱^{なづ}し東流^{とうりゅう}し賽音諾顏汗部^{さいいんだくえんあなぶ}の中末旗^{ちゆうまつはた}に到^{いた}り哈瑞河^{はるいか}を會^あひて東流^{とうりゅう}し厄赫河^{いはか}を會^あひ是^{これ}より水勢^{すいせい}盛^{さか}んにして土謝汗部^{どせつあなぶ}の境^{まが}に入り布呼圖河^{ふほとが}を併^あせ北路^{ほくろ}右末次旗^{うまつじはた}と次右

翼右旗の分界を灌溉して二三の小水を合せ、布龍山の北麓を經過し楞爾坤河を會し水量益々加はり流勢稍緩となり蒙露の分界を踰へ、露領後貝加爾州に入り更に大小數川を合せ北流し又西北に折れ終に貝加爾湖に注ぐ、此河源甚だ長延にして群山の間を環流し大川巨流の之に注會するもの擧て數ふべからず、國疆に接する邊は河幅約百五十米突兩岸榆柳叢生し河水清深、土人引て以て灌溉の用に供せり、此河の上流は約三千二百餘尺の高地にあり、其下流に至るに及び地形漸く低下し河底隨つて深く河岸亦高く且急なり、運輸の便あるも汽船は唯良好なる時期に於て通ずるのみ、其上流は河心に往々沙洲ありて舟行困難なり。

鄂爾坤河 は色楞格河の支流にして二源あり、杭愛山の南麓及東麓より出づ其流域は賽音諾顏汗、土謝圖汗の二大部に跨り色楞格に次ぐ大河なり東北流し章楞山、西爾哈阿濟爾汗山等の山間を貫流し西庫倫の西方を経て曲折流し

瑪濟爾台河を會し、西北流し衣蘭喀勒奇拉河を合し東北流し濟蘭蒙古魯克河哈爾渾木克河、哈噶思賽因杜魯河、土拉河、衣遜河、齊雅圖河、等を合し色楞格河に入る、其の濟爾瑪台河と合流する附近の沿岸は曾て元の太祖の墾殖せしことあり、清朝に至り康熙五十四年土謝圖汗に詔して所部の耕種すべき土地を勘査せしめたるに鄂爾坤、圖拉の附近蘇呼圖、路刺烏蘇明愛察罕格爾、庫爾奇呼、札布堪河、察罕度爾布拉罕口、烏蘭木固及額爾德尼招の十餘處は俱に耕地に適することを奏言せり、是に於て公傳爾丹なるものに命じて農耕に熟せる人を選びて住て屯種せしむ、其後雍正六年十二月振武將軍宗室巴賽の報せし山田の收穫は青裸麥糜凡そ二千八百四十石有奇にして同七年十二月に振武將軍順承郡王錫保の奏報には鄂爾昆、濟爾瑪台、圖拉の三處の屯田收穫は大麥小麥糜子凡そ六千六百五十石有奇其翼九年は麥糜合せて一萬六百三十石有奇なることを記せり、唯此地方は霜降早晚一定せざる爲め従つて

其收穫豊凶一ならずと雖も農耕を爲し得る地たるや明かなり。

土拉河 は二源あり一は特勒爾集嶺の西麓に發し一は嶺北の小肯特山より發す、二源已に合し西南流し哈溪河、喀拉鄂模空鳥魯の二水を合し啓拉薩山の西麓を経て阿拉克仙河を會し特勒爾集河を受け南して興安嶺山脈の一支脈に沿ひ河水頗る深く急流にして曲折西流す、其南岸は昭莫多の地(車倫)にして樹木森立せり、河流更に西北に折れ庫倫城の南汗山の東北麓を経て喀魯哈河を會し、又西流して色兒必河を納れ西南流し杜蘭哈拉山の北麓を經過す、山南は即ち大沙漠なり、其より折れて西北流し哈魯武哈河を會し西北流し遂に鄂爾坤河に合す、延長約二百里。

哈拉河 は其上源を通克拉河と曰ふ、土拉河源頭の北方汗山と相對する肯特山脈の色勒弼嶺より發するものを揆河と曰ふ、北流して那休河と合し布勒、哈太の兩河を會し北流し通勒河を合し西北流し陀羅什山の北哈達圖爾山の南

を経て博羅河を會し又西北流し查克都勒河を會し都拉遜檜拉那查克丹の東方大松林の間を過ぎ喀里雅喇山の東麓を巡り北流して鄂爾坤河に入る、延長百餘里諸山の間を環繞し水清くして流勢激しく兩岸に榆柳蓼莫等叢生せるを以て夏日には蚊虻極めて多し、河中又魚類に富む。

丙、湖 沼

東蒙古の湖沼は之を西部及青海諸部に在るものに比すれば皆小なり、其内稍大なるものは克什克騰部の達里諾爾車臣汗部の貝爾諾爾の二三に過ぎず然れども陰山及興安嶺山脈より發源する泉流の滲して小湖となるものは南方内屬察哈爾八旗の牧地より錫林郭爾盟各旗の牧地に星布し、其數實に枚舉に遑あらず、中に二三の鹽湖あり、其最良にして産額の最も多きものを烏珠穆沁に於ける太布蘇圖泊とす。

達里諾爾 是達里泊又捕兒海子と稱す、内蒙古の西南部克什騰旗の西北三十里、海拔四千二百尺の高地にある大湖にして周圍凡そ三十里に達し、公姑爾河、野猪河等の諸水皆之に注ぐ、湖中に島嶼あり、魚類水禽多く漁獵俱に利あり、其魚類の如きは遠く多倫諾爾地方に輸出するに至ると曰ふ、魚類は毎年五六月の間湖水より流れに溯りて進み河渠を填塞するに至る、之を以て克什克騰、阿霸垓、阿巴哈納爾諸部の土民皆其利を享く、其産する魚には滑子魚最も多し、湖東に岡愛諾爾あり、廣さ約十里兩湖は一小河を以て相通ぜり、湖水は鹽分を含み冬季は常に厚さ三尺に達する堅氷を結び四月乃至五月に至つて始めて解く。

貝爾諾爾 是車臣汗部にあり一名布伊爾湖と稱す、東蒙古と滿洲との疆界に跨れる一大湖にして東北より西南に至る二十餘里東西十里あり。東部蒙古中の大湖にして湖東の興安嶺山脈中より發源せる喀爾喀河の水を匯ふるものな

を「マンリ、湖水は北岸より流出して烏爾順河となり呼倫湖に入る。其他月亮池、白水濼、百湖、黑水濼、大魚濼、埒羅呼吉、池固爾班泊、察罕泊呼爾泊、滾諾滾呼倫湖等あるも之を略す。

丁、沙 漠

東蒙古一帶の地は、河川の流域にある僅少の地區と、興安嶺及陰山山脈の山地を除くの外悉く含沙地帯なりと云ふを得べく、而して其含沙量の厚薄により自ら交通其他に及ぼす影響に差異あり、興安嶺の東部西喇木倫西部にありては錫林河の流域附近より北方は概ね砂に交ゆるに礫土を以てし、地盤堅硬にして車行容易に、且つ青草繁茂して牧畜に適す、其沙地帯と稱するは内外蒙古の中間に横はる瀚海を基礎とし東西南北に擴がり、内蒙古にありては蘇尼特部の北方より阿霸垓旗を経て克什克騰旗の東に至り、興安嶺山脈に

依つて遮断せらる、夫より更に西喇木倫の上流に至り、同流域に沿ふて東走し遼河に至りて盡く、其延長約五十里幅員は廣狭一ならざれども阿羈垓附近に於ては其幅員約四十里に達す、其より東方西喇木倫に沿ふ部分は大に狭少となり、五里乃至十里の幅に過ぎず、老河附近に至りて幅員漸く廣く十里乃至二十里となり、奈曼博王旗に入りては更に廣大となりて三十里より四十里に達す、外蒙古車臣汗部南方及其西方に亘りて更に一層廣大の地區を占む、此等沙漠地帯と雖も全部沙地にあらずして、多くは砂礫地をなし、全部小砂にして小石をも交へざる眞の沙地は其間に所々帶狀をなして存在するのみ、其幅員約二三百米突より廣きは五六百米突に亘るものあり、其最も甚だしきは「ネルテンゴロ」の流域一帯より達賴罕王旗の南に至る間とす、此れ等の沙地は多くは燼灰に類する細沙粒より成り、短小粗鬆なる灌木と雜草とを以て蔽はれたる圓錐狀の沙堆を成す、此沙堆は漢人之を沙堆子と稱し蒙古人之

ハ」と稱す、又或ひは白皚々たる沙山を爲し、殆んど車輛の運轉を許さざる部分あり、其砂の深さは表面五六寸乃至一尺軟弱にして下層は數尺に達し、尙下層は堅固の地盤を有するが如し、大風に際しては、恰も吹雪の如く土灰沙粒天に漲り咫尺を辨せず、爲めに前人の足蹟を填め方向を誤る懼あり、降雨に對しては雨水の浸潤力強きを以て大なる影響を受けず、沙堆子中には所々に低濕地を抱擁し全く別個の土壤を有して青草繁茂しあり、漢人之を甸子と稱し蒙古人之を他拉と云ふ、其廣さは大小一ならざれども數町より數百町歩に達す、此等甸子の中には往々にして一隅に溜池を有し又稀に曹達を産す、沙漠地方に住する人民は、大抵皆低平地を撰んで居を構へ牧畜をなし又は耕作に従事す、甸子は概して地盤堅硬なるを以て、沙漠地帯の道路は多く甸子より甸子を傳ひ、著しく迂路ならざる限りは屈曲して可成甸子を通過する如くしつゝあり。

人二、氣候

蒙古は海岸を距ること遠く、大陸内部の空氣は常に海洋に向つて流動し、爲めに冬季は其氣候を著しく严寒らしむると共に、天候は常に快晴且乾燥ならしむ、其變化は猛烈にして寒暑の差は著しく極端なり、而して東蒙古に於ては其廣漠たる地形上土地の高低、山脈の向背、人煙の粗密等諸々の原因により一小部分に於ては各變化あるを免れざるも大體上之を興安嶺の東部西部及南部即ち支那本部に接續する地方の三に區別するを得べし。興安嶺は實に東蒙古の氣候を變化せしむる主なる原因にして嶺の東部は北滿洲の氣候に相似し、秋季靜穩の日晝間稍溫暖を感じるの時と雖も、一度興安嶺踰えて西部人煙稀少の高原に出づれば寒氣酷烈朔風肌を刺すの感ありと云ふ、南部即ち支那本部に接壤せるの地方は、本部地方に於ける溫暖なる氣候

氣候の變化

の影響を受くることあるが爲め、沙漠高原地方の如く猛烈ならず、只風向西又は西北に變ずるときは、忽ち北方大陸的氣候の爲め、俄に劇變覺ゆと云ふ以下主として興安嶺の東部及西部地方に於ける概況を説く。四季の期間 蒙古に於ける四季の期間は氣候溫和なる春秋と稱すべき間最も短く冬季の寒冷夏季の暑熱相半す、即ち三四月より九十月までは暖暑にして大抵九月下旬降霜し十月上旬、中旬降雪し四月上旬より五月上旬に至り始めて融解す、其寒暑相移るの少時期は所謂春秋と稱すべきものなり。氣候の變化 大凡大陸地方殊に土地不毛にして砂礫に富める所は水溫の變化尤も大なるものなり、蒙古に於ては冬季は其緯度の上より見るも頗る严寒なるが、夏季は暑熱の度比較的輕微なるの感あり、之れ夏季は日光の直射を受くるも、廣漠なる砂質の平原は溫度の放散すること速かなるに地因す、興安嶺東部に於て七月中旬華氏最高百三十五度、最低八十六度一ヶ月の平均約

晝夜の長短

百三度なるが、同西部に於ては同月中最高百二十二度最低七十二度一ヶ月平均九十二度三分を示せり、即ち暑熱に於ても嶺の東西約十度の差を見るべし一日中の晝夜に於ても氣温の變化亦甚だしく、夏季と雖も夜間は寒冷を覺ゆるを常とす、甚だしきは華氏二十度乃至三十度の差に及ぶことあり、其變化の著るしきは所謂春秋と稱すべき頃にして、靜和の日は日中稍暑氣を催し、華氏七十度内外を昇降するも日没するや風起り忽ち寒冷を感じて二十度内外に降り飛雪紛々たるを見ることあり、興安嶺西部は此差殊に甚だしきを以て四季單衣を用ゆることなく夏季と雖も猶ほ綿入を纏ふと云ふ。

風位及風力

晝夜の長短 就て興安嶺に於て調査せるもの左の如し。
八月 日出午前四時 日没午後八時三十分即ち 晝間十六時間半 夜間七時間半
十月 日出午前七時 日没午後四時三十分即ち 晝間九時間半 夜間十四時間半
風位及風力 蒙古に於ては四季共に概して多風に其力も亦強大なり、大凡平

雨雪量

原若くは荒廢せる地は急劇に温度を吸収し又急劇に之を冷却するを以て容易に氣壓の變動を來すを常とす、殊に蒙古は中部亞西亞に於ける氣壓の變化を受、五月より九月に至る間は南、東南及東風起り秋冬より早春に至る（九月より四月）間は北及西北方の烈風あり、而して風は夏季に少く冬季に多し又沙漠地帯にては春秋の候烈風屢々起りて其勢砂礫を飛ばし草木を捲き天日を遮し白日爲めに晦冥咫尺を辨ぜざることあり。
降雨期は七、八の二ヶ月にして雨量は一般に少し、雨期に於ては多くは驟雨性にして長期に亘り間斷なく驟注するものにあらざるも、此期間に於ける雨量は正に年中の八割を占め、河川は水量頓に増嵩して一時諸村落間の交通を阻止することあり、然れども其減水極めて速なり。
今左に實測せる氣温を表示す。

東蒙古氣象表 (華氏)

期	位		時	置
	高	低		
夏季 (七月)	最高	最低	度	度
	平均	平均		
冬季 (自十二月至一月)	最高	最低	度	度
	平均	平均		
興安嶺東部 (圖什業圖旗附近)				
夏季 (七月)	最高	最低	度	度
	平均	平均		
冬季 (自十二月至一月)	最高	最低	度	度
	平均	平均		
興安嶺西部 (東烏珠穆沁旗附近)				
夏季 (七月)	最高	最低	度	度
	平均	平均		
冬季 (自十二月至一月)	最高	最低	度	度
	平均	平均		

第三編 人文地理

一、住民

甲、人種人口

東蒙古の人種は喀爾喀族にして身軀長大ならざれども体格強壯面貌平扁皮膚赫色を帯び、頬骨高く幼少の時より剃髪することなし、其性勇悍にして善く勞力に堪ゆ、人口は二百万内外にして其内過半は漢人なるが故に、眞の蒙古民族は八十万乃至百万の間にあり、其面積に比すれば頗る稀薄にして、一方里僅に二十餘人に過ぎず、是れ其の居住に適せざる沙漠地帯を包有すると遊牧には廣き土地を要する爲めなり、而して其支那内地に接近せる部分は人口稍稠密なり。

乙、言語文字

言語は滿漢語と異なる固有のものにして、動詞の働きは我邦語に同じ、蒙古人相互の談話は必ず之を用ゆるも、開拓地附近の住民は漢語を解するもの少なからず、文字も亦蒙古固有のものあり、形滿洲文字と酷似し、其字母の數百餘個にして之を綴合して萬象を現はし、讀方は縦に讀下し、左方より次第に右方に及ばすものなり。

丙、住民地

東部蒙古の住民地は其生計の狀態及家屋構造等の差異よりして概ね五部に分つことを得、即ち純遊牧地帯に於ける移轉式蒙古包部落、農牧混合地帯に於ける固定式蒙古包部落、同上地帯に於ける土塊式家屋部落、農本位の移住

民部落及喇嘛部落是なり、現今東部蒙古に於て移轉式蒙古包の存するは僅に其西北隅烏珠穆沁、浩濟特、阿巴哈納爾の各旗及外蒙古地方に於て之れを見るのみ、蓋し近時蒙古邊境の地は、開拓日々に進歩し漢族移民の侵入壓迫を蒙り、其固有の生業たる牧畜業は漸次衰退に赴きつゝあるに依る、遊牧地帯に於ては、家屋の大集團は其生業と相容れざるを以て、部落は普通蒙古包數戸乃至十數戸より成り多きものと雖も十戸以上に出づるは稀なり、此等の部落は四時一定の地にあることなく、日々家畜をして居住附近の良草を喰はしむるが故、草盡れば更に他の良好なる牧地飲料水を求めて之に移住せざるを得ず、而して原則として夏季は河川沼澤の邊を撰らみ、冬期は風雪を厭ふて山腹の日陽に居を下するを常とす、是れ夏は低地の良草並に飲水を取り、冬は低地は風の爲め草を没するまでに雪を堆積すれども、山上は雪少く草の現はれあると、雪を飲料に供するを以て、隨所に水を得らるゝを以てなり、故

に此地方の地圖を描かんと欲するも、確實に住民地を記するを得ず、唯住民地に適する地即ち牧草ありて飲水に乏しからざるの地名を標記するを以て満足せざるべからず。

漸次東南して克什克騰、巴林及興安嶺以東の地方に至れば移轉式蒙古包は漸く固定式となり、周圍に墻壁を繞らし基礎を搗固し、家屋附近に若干の耕地を見る、然れども其本業は猶牧畜なるを以て大なる集團部落を見ること稀にして通常二三若くは五六戸を算するのみ。

次に移民の住する開放地に近づけば、漸次丸き蒙古包は其形を收め、土塊式家屋を目撃す、此等も亦大部落をなすことなく、依然牧畜を本務とし、農耕は副業として僅かに自家所要の雜穀を耕作するに過ぎず。更らに東南して既に直隸若くは東三省の行政管下に編入せられたる蒙古地に至れば、漢蒙人雜居し農耕を以て主業とし、牧畜は副となす、家屋の構造は皆滿洲式土造或は

磚造にして數十乃至數百集團して部落を成し、所在大小の市街ありて商戸櫛比するの地區に入る。上記各種の住民地を通じ、常に異彩を放ち特に吾人の注意を喚起するものは喇嘛廟なり、其周圍には大小喇嘛の住宅軒を並べて建設せられ、所謂喇嘛街を形成す、此等の廟は蒙古各旗を通じて各地に建設せられ其結構は住民貧富の度に應じて大小一ならずと雖も、悉く景勝の地を占め磚造にして宏壯を極め他の蒙古家屋に比して頗り尊嚴の感を與ふ、其大なるものありては戸數々百、喇嘛數千を收容し小なるものと雖も戸數數十喇嘛數百人を下らず、而して其附近には喇嘛信徒たる土人の張幕居住する者多數にして、且一二行商支那人の天幕を見るを普通とす、又喇嘛廟には必ず井戸の設けありて四時清水を得べし、故に遊牧地帯を旅行するに當つては喇嘛廟を目標とすれば、最も確實にして利便る得ること多し。

丁、風俗

東蒙古は其區域廣汎なるを以て其風俗習慣等地方に依り多少の差あるを免れざるも、大體に於て興安嶺を以て分界とし、其東南各地と其西北各地との二つに分つべく又其西北部は外蒙古、錫林郭勒盟、察哈爾の三つに分つべく、東南部も亦既に開拓地と開拓地に接する地と興安嶺山脈麓との三つに分つべし。昔成吉思汗の鐵騎が世界を震駭せしめたるの事蹟を讀めるものは何人と雖も、蒙古人が當時如何に慄悍勇武なりしかを疑はざる可し、今日に於ても其容貌と風俗とを察すれば眞に其の然るべきを信ぜんとするも仔細に真相を観察すれば其然らざるを發見すべし、性質は朴直慇懃にして親むべく、感情的にして怒り易く喜び易く愚鈍にして粗野淡泊なること小兒の如し、是れ畢竟清朝累世の對蒙策の成功せし結果にして、喇嘛教教化の然らしむる所たり

彼等の大部は生存競争圏外に超然として利害の念なく、又其必要を感じず、牛羊を伴侶として喫茶吹烟眠食を貪り、醉生夢死只管讀經念佛を之れ事とし後世の冥福を希ふに餘念なく敢て複雜なる人世の苦難を知らず、然れども若し一の動機ありて之を刺激し其性情を反撥するあらば、將に必ず祖先の遺傳的性情を喚發するなるべし、彼等が驛馬に鞭うちて曠野を疾驅し縱橫無盡所謂鞍上人なく鞍下馬なきの勇壯なる状を見れば轉た往昔の勇敢なる氣象を偲ばしめ、其野獸を屠るや婦女子も尙平然容色を變せざるが如きは元より其必要に迫られたる結果なるべきも、亦以て遺傳的性情を推するに足る、現に開拓地附近の蒙古人にして滿漢移民の侵略的壓迫を受け生業を失ひたる窮民は往々匪群に投じ暴行を敢てして顧ざるものあり。蒙古人は人に接すること甚だ親切にして其同族知己の間に於ては勿論、外來未知のものと雖も一度相知るや一見舊知の如く一家擧つて之を歡待するの風

あり、故に偶々旅客の驟雨に逢ひ若くは夜間一宿を乞ふものある時は其所屬の明かなるものに對しては常に同情を以て歓迎す、然れども由來人烟稀薄にして行政普及せず所在惡徒の出沒するあり、且つ各村落は互に遠隔し自村外の人に接すること極めて少なきを以て外來人（外國人又は支那人）に對して頗る恐怖し、或は卑下して容易に入ることを許さざるを常とす、而して外來者の人員多く勢力大なるものに對しては善惡に拘らず其爲すがまゝに任せ往々家を空にして逃げ去ることあり、之に反し小勢なるときは侮蔑して一切取合はざることあり、但し外來者にして士著の蒙古人を伴ふときは便宜多く官の認許を有すれば更に便なり。

右の如く外國人に對しては之に接するの機會少なきを以て甚だ恐怖するも、一度慣るゝ時は轉じて珍客として婦女小兒に至るまで親しく近接するを常とす、我邦人の旅行者に對しても中には往々周章して遁し去るものなにも非ず

と雖も、其多くは恐怖の狀なきのみならず之を嫌忌せず寧ろ珍奇の異人として之を遇し、談笑數次に及べば好く慣れ好く親しみ其頭髪顔面の等しきを見て、或は同胞と呼び朋友と稱するに至る、札薩克圖、圖什業圖、及達賴罕、博王、賓圖等の各旗は日露人の往來せしもの少なからず、而も此等地方の蒙古人が邦人を遇することは寧ろ支那人の上に見るも亦奇と曰ふべし、蓋し彼等は古來尙武の風ありて新に露西亞に勝ちたる勇武なる邦人を愛慕するに由るものゝ如し、然れども張家口より庫倫に通ずる大道附近に在りては露國人の往來久しく、爲めに種々の害毒を受くること多きより總て外人に對する感情も亦良好ならず、更に庫倫を越へて露支國境方面に至れば此地方の蒙古人は露人の外殆んど外人を見るの期なかりしを以て、如何に彼等の爲めに暴行を蒙るも其文化の優れるに驚き恐怖と畏敬の念あるのみにて却つて怨聲を耳にせずと曰ふ、蒙古人は外國人を俗に『オロス』と稱し日本人を『イ

ボンノオロス』と曰ひ、西洋人を『シヤルオロス』と曰ふ、又開拓地の附近にては一般外國人に對し『鬼子』なる惡罵をなすものあり、蒙古人の滿漢人に對する感想は一概に之を論ずべからざるも彼等の多く接觸する處の移住民は暴利を貪る奸商にあらざれば、暴慢無智の兵士なるを以て自ら之を嫌忌する傾きあるを免れず、蒙古人は常に自ら稱し誇つて曰く、我胸裡には佛の在すあり、何をか恐れ何をか憂へん、然れども滿洲人には是なしと、以て蒙古人の滿漢人に對する一般の觀念を知るに足るべきなり、蒙古人は滿漢人を『マンザ』又は『キルグン』と曰ふ。

滿漢人の蒙古人を見るは全く之に反對にして蒙古人を野人と曰ひ、其住地を野地と稱し著しく侮蔑するを常とす、彼等の深く蒙古内地に入り行商に従ふものは一面勢力の及ばざると一面顧客たるの故を以て言語其他一般に町重なれども、若し蒙人にして漢人の市街附近に来るものあれば蒙古々々と一種

輕侮の句調を用ゆるの風あり、殊に開拓地附近に於ては屢々狡智を用ひ蒙民を苦しめ無法なる訴訟を提起し其無智に乗じて土地財産を騙取するの例少なからず、獨り移住民のみならず官吏兵士に於ても亦數々蒙民を苦しむるものあり、就中兵士の如きは往々馬賊の名の許に善良の蒙民を捕へ之れを拘留すと曰ふ。

蒙古は族長制たり王公は其部族の總長にして以下毎族各一人の族長を設く、而して各家族に於ても家長制を採り家長たる男子一家の全權を有す、而して其子を以て族長又は家長たらしめるものなきとき家督者幼少なるとき其母が子に代つて一家の實權を有するは當然のことに屬す、家長老疾事に耐へざるに至るか若くは死亡するときは其長子を以て家督を相續せしめ長子故障あるときは二男三男の内より適者を選びて相續せしむ、又女子のみなるか或は子なきときは同族中より養子を爲さしめ一家の斷絶するを許さず、家長數子あ

るときは長男を留め他は皆出家して喇嘛たらしむるを例とす、然れども近時
數子あるものは分家せしめ戸數を増加し喇嘛となさざるもの又少なからず。
男女の關係は男尊女卑なり、男子は外に在りて王事に勤め演武（狩獵）等に
力を用ひ、女子は家に在りて家事内政を掌る、男子は辨髮（喇嘛を除く）
を蓄ふ、日常の業務は家畜を放牧し燃料を採取し其農耕を爲す地方に於ては
耕耘收穫に従事し女子は日常家庭に於ける一切の業務を負担するの外朝夕の
搾乳より牛酪、乾酪、奶皮子の製造に任じ出で、は水を井戸又は泉より汲み
獸糞を拾ひ之を乾かして小屋の周圍に貯存し、又一家の者の爲めに衣類を作
り靴を製す、而して必要あれば男子と同様乗馬して原野を疾驅する等其業務
實に多端なり、其性頗る快活にして漢婦人と異なり深窓に束縛せらるること
なく全く獨立の生活を爲し隨意馬に乗り外出し、單獨に他人の居屋を往訪す
妙齡の婦人が男子と馬を並べて語り行くも人之を怪しむなく男女の交際全く

自由なり然れども開拓地に至つては漸次漢民の風習に感染し此純遊牧民的の
状態を失ひつゝありて女子の騎乘等は容易に之を見出す能はざるに至れり。
貧窮は同族に於て救恤し之を養ひ、寡婦孤子も亦同様に之を尉撫す、故に蒙
古に於ては非人乞食の徒を見ず。
内蒙古の東南部一帯の地は漢人種の棲息するもの多く、到る處村落を設け耕
作に従事し以て其生計を營めり、而して此等漢民は移住當初獨身のもの多く
従つて蒙古婦人を娶りて雜種を生じ、然らざるも蒙古人は漢人の感化を受け
其風俗性質全く漢人と同一たるに至り其性質の如き狡猾譎詐にして蒙古從來
の朴實なる風習は之を發見する能はざるに至れり。

イ、衣 服

蒙古人の服装は地方毎に多少の差異あるも、元來清朝の服制に由るものにし
て衣服馬装等各部略規を一にす、唯之を滿漢人に比するに一般に寛濶なると

上衣は赤色、紫色、黄色等多く目立つ色合を用ゆる差あるのみ、而して其外被は通常丈長くして束帯を解けば地に達すべし、故に就寝の際は以て掛布団の代用となすに足り著装時は僅かに引上げ絹又は木綿の帯を以て腰部を緊束す、故に彼等の則背部には著しく其皺襞を見る、帯は其中央を背後より前方へ繞らして交叉し、腰部の兩側に挿み其端末を垂下す、束帯の前部には嗅咽草入を右側には食食用の小刀を後部には燧石を下げ烟袋は左腰に烟管は或は之を長靴中に挿入し或は左腰に挿むを普通とす、而して其上に更に上衣(夏冬の二様あり)を用ひ革製又は布製の靴を穿ち常に帽子を冠り或は手拭ひを以て鉢巻をなし、手には珠數を持ち頸には佛像を吊し外出に際して必ず鞭(長さ二尺餘の藤の杖多し)を携ふ、今左に地方別に従ひ其異同の概要を説述す。

興安嶺の東南部は東蒙古中最も文化の進みし地方に屬するを以て衣服も其西北部に比すれば稍進歩せり、此部も大體に於て更に三部に分つ。

1、開拓地方に介在する蒙民は殆んど滿漢移民と同一の服裝をなし一見漢民と區別し難し。

2、開拓地隣接地方に住するものは、年々移民の感化を受け知らずく同化されつゝあれど、之を滿漢移民に比すれば一般に粗野にして判然區別し得べし。

3、興安嶺山麓地方にあるものは更に粗野にして且つ著装甚だ不潔なり。以上の區域中後二者は靴帽子等多く自家にて製し滿漢民又は前者の如く既製品を用ゆること少し、又婦女は種々の刺繡を爲す、靴の製作は彼等婦女の尤も誇りとする作業の一に屬す、又此の區域の婦女は刺繡稍巧みにして遠來の珍客等より物品の贈與を受くるあれば、其刺繡ある煙草入等を返禮として贈るを常とす。

興安嶺の西北部に於ける住民は其東南部に比すれば遙に粗野にして一部地方

を除く外は市場に遠く且土地概して磽确なるを以て資産乏しく従つて服装も亦甚だしく劣れり、之等の地方は古來蒙民の本據たりしを以て蒙古固有の習慣を有し外蒙古に至つては更らに甚だし、一般に深き廣濶なる牛革靴を穿つ其靴、帽子煙草入の類に至るまで大抵漢民の手に成るものを購入使用し、靴の如き男女同一のものを用以自家に於て製するもの殆んど無し。蒙民は滿漢人に比し一般た貧窶にして生活の程度低きが故に絹布を用ゆること少なく概ね綿布（凡て無地にて青、赤、淺黄等の染色を好む）を用ゆ又喇嘛は黄服又は紅服を著用するも高級喇嘛は専ら黄服を用ゆ。衣服は一度新調せらるゝや爾後洗濯又は修繕を加ふることなく、如何に汚垢に染むも、如何に破損するも之を意とせざるものゝ如く、大破して用を爲さざるに至り始めて之れを棄て新衣を買ふ、總じて不潔の觀念なく、食後食指の汚れは之を衣服にて拭ひ食器の汚塵も亦自己の袖又は衣服の一端にし拭ふなり。

加之日々家畜に接し馬に跨り地上に坐し風雨に曝さるゝを以て、衣服の保存の難きは當然にして常に汚穢に染したる襤褸を纏ひ居るも亦偶然にあらざるなり。

婦人の服装も亦地方に依り多少異り今其一端を述べれば、哲里木盟内の婦女は漢人の服装に比し極めて寛なる廣袖の衣服を著し、其裾殆んど足を蔽はんとす、靴は手製の長靴又は短靴にして縐子天鵞絨又は綿布等にて作り頭髮は前頭に於て兩方に分ち後頭部に於て結束す、而して美しき花簪を挿するもの多く處女は前頭を二つに分後部に於て辮髮として垂下し其根本は紅色の毛糸等にて結び、外出のときは多く車を用ひ馬に乗ること少く帽を戴かずして木綿無地の手拭を冠る、昭烏達、卓索圖地方又同一なれども此地方に於ては既婚の女子は後頭部を長く突出せしめ恰も握拳を附したるが如きものを飾付くるものあり、錫林郭勒及察哈爾地方にては珊瑚又は硝子製の瓔珞様の

ロ、食物

ものを前額部より後頭部に垂下し其房を耳の前方頭に至るまで垂る又上衣に著るしく飾を爲す、靴は長靴を穿ち短靴を用ゆるもの少し。
外蒙古に於ては頭髪を分ちて二とし、之を形に開きたる上、更に耳の後部に於て眞鑄製の管筒に挿入し垂下せり、多くは帽を戴き衣服は肩怒り胸窄く迫り殆んど西洋婦人の服に類似す靴は常に長靴を穿つ。

蒙古人の常食は大體に於て乳、茶、羊肉、及黍又は其他の雜穀、小麦粉、干餛飩等なれども各地方に就き異なる點を擧ぐれば

1、興安嶺の東南部中開拓地方にありては移住民と均しく高粱、粟、黍、其他の雜穀野菜類を用ひ牛乳及其製品を用ゆること無し、開拓地に隣接せる地方に於ては黍及粟を主食とし牛乳又は其製品獸肉を混用し野菜類を用ゆ、又興安嶺麓地方に於ては主として牛乳其製品又黍を用ひ稀に野菜を食し獸肉を

用ゆ。

2、興安嶺の西北部中外蒙古及錫郭林勒盟地方に於ては雜穀野菜共殆んど全く耕作せられざるを以て黍は甚だ貴重なり、故に一人一食僅かに一握位を食するに過ぎず此地方に於て良食と見るべきは茶、乳、及羊肉等なり、小麦粉干餛飩の如きは珍らしき馳走として富者又は王公等にあらざれば用ゆること稀なり、察爾哈及其西部に住する人民も略同一の状態なれども近時開墾の進捗に伴ひ漸次雜穀豊となり且從來と雖も市場に近きを以て前者に比し便多く従つて穀物を食すること多し。

蒙古人の牛乳を用ゆることは頗る巧みなり、生乳は多く下痢起すの恐れあるを以て普通之を用ひず、其搾取は夏季に於てし冬季は之を行はず搾取を爲さんとするや豫め放牧に際し犢は悉く一群として家に止め、母牛のみ終日野に在つて十二分に草を食はしめ夕刻乳房便々としたるとき之を家側に導き

先づ一つの犢を出し母牛の乳を吸はしめ直に犢を別所に置きて母牛の乳を搾取し搾り了れば又犢をして自由に飲ましむ、其他凡て此の如く一牛一日の搾取量は平均四五合なり、一家には大抵四五頭乃至十數頭の乳牛ありて之を搾るは女子の作業なり、搾乳を了れば之を三四升を入るべき鍋に入れ沸騰せしめ其上に凝集する脂肪分を一回乃至二三回に取り去り、之を別に貯はへ其餘は桶に入る、日々如此にして貯はへたる脂肪分は之を「ウルモ」支那語に「ウルク」は牛乳中の精として尤も貴重せらる、而して其大部は集めては黄油を作る、黄油は「ウルモ」を強く煮て油となし又凝結せしむるものにして其の味頗る佳良なり、油を取りたる残滓も捨つることなく之を食す。其桶に入れ置きし脂肪を去りたる残部は又諸種のもの製せらる、其一は之を煮て水分を去り常に攪拌して練り充分水氣の蒸發するを待ちて恰も我邦の

蒟蒻を製する如く木製の箱に入れ、方形に切り日光に晒して乾かし茶に入れて用ひ又は貯藏して冬季の用に供す、之を「ウオチカ」又は「ボシルガ」と云ふ（支那語に奶豆腐と曰ふ）又一種の酒を製す、其法は牛乳を腐敗醱酵せしめ之を蒸餾するにあり恰も焼酎を製すると同法なり、之を「スーヌエレハ」と云ふ、又牛乳を腐敗せしめ其の酸味を帯びたるものを用ひ小麦粉を混じて乳菓を製す、奶豆腐は内蒙古にては種々の模様を附し又は菓汁を混じて赤色に染めたるものを製する等、稍意匠を凝らせども烏珠穆沁部及外蒙古等に於ては木箱に入るの勞を省き單に手にて握りて乾かすもの少からず、奶豆腐は牛乳製品中最も多量に用ひらるゝものにして旅行のとき等は木箱を携へざることなし、乾きたるものは甚だ固きを以て火に炙りて之を用ひ興安嶺の西部に於ては羊乳を搾取して之を用ゆ羊乳は一種の臭氣を有す。黄油は黍を食するとき混じて之を用ゐ又羊の胃囊を乾かしたるものに詰

め其の口を糸にて結び冬季の貯藏に用ゆ、其の一部は商人の手に入り北京其他蒙古周圍の市場にて販賣せらる良質にして一斤(十六)の價十七八錢乃至二十四五錢なり。

乳酒は白色透明にして無臭無味清水に異ならざるも之を用ゆるときは酔ふ蒙古人は酒を好むこと甚だしく毎戸大抵乳酒を醸造するも其の量多からず、故に日用用ゆることなく偶に行商漢人の焼酎を携さふるか又は市場に出でたるとき多量に之を用ゆ。

蒙古人は一般に茶を喫すること極めて多量なり茶は支那本土より輸入す、之を用ゆるには茶水の中に牛乳と少量の鹽を混ぜ、奶子茶又は蒙古茶と云ふ、蒙古にて單に茶と稱するものは即ち此茶を指す茶の飲用は時を定めずと雖も一日平均三回乃至六七回に及ぶ、興安嶺の東南部及察哈爾地方の大部分は粗末なる陶器類の茶碗を用ひ貧者と雖も其の家族の人員以上を有するも其の西

北部烏珠穆部外蒙古等の地方にては王公又は富裕の家にあらざれば陶器の茶碗なく皆木を削りたる一種の碗を用ひ各自各一個宛にて來客に供する備へなし外出するときは常に之を懷中し何れの家にて喫茶に應ぜらるゝ如くす木碗は喫茶し了れば各自舌を以て内部を甜め清むる外之を洗ふこと稀なり、蒙古に於ては來客てれば必ず茶を勸むるの風あり、隣人喇嘛其他何人の來るも皆團座喫茶す。

鳥獸肉には牛、馬、羊、豚、鶏、其他鹿、兔、野羊、雉子等の野生鳥獸肉を用ひ、牛は富者にして大典あるときに限り屠殺することあるも平常は只斃死の牛肉を食するのみ、其用量極めて少なし、馬肉も斃死のものをを用ひ、羊肉は各地共最も多く豚鶏は開拓地方に於て僅かに用ひられ、野獸肉は兎尤も多く、狼、野羊、鹿等一部地方に狩せらるゝのみ雉子も亦少なからず、野獸は春秋及冬季に於て狩りし夏季に於ては少なし、獸肉は少量の鹽を入れて味

を附す但し開拓地附近にては若干の味噌又は醬油を混用す、獸肉中牛馬羊等
は一部を乾肉として貯はふ、凡て獸肉は皮を剝取りて行商人に賣り必需品と
交換し又は敷物衣類等に用ゆ。

獸肉を煮るには五斤十斤位の少片に切り分たる後沸騰せる白湯中に僅に鹽を
入れ此中に肉片を入れ熟煮を待て取り上げ其液汁を飲み其肉を食ふ、而して
最後に液汁中に少量の粟又は黍、饅頭等を入れ粥様のものを製して食ふ、肉
を食ふときは小刀を用ひ、各自與られたる小片を手にして邦人の梨又は柿等
を切食するが如く細片となして口にす、而して小刀を用ゆることは甚だ巧み
にして臟腑軟骨及背髓等をも餘す所なく悉く之を食ふ、又彼等の肉を食ふ
は副食物として用ゆるにあらずして單に肉のみを食ふ、故に肉を食ふときは
他の食物を用ひず、然れども家畜は尤も貴重なる財産なるを以て平常は數日
又は十日に一回其他來客祝祭日等特別の場合に於てのみ之を屠殺す。

穀物は黍を主とし小麥粉之に亞ぐ野菜類は白菜、葱、胡瓜等開拓地方又は其
隣接地に於て食するに過ぎず、烏珠穆沁部より西北方に絶ては絶てて野菜な
し而して此地方には野生の菲あり稀に之を食ふ、雜穀は東南部各地に産する
も西北部に産せず。

黍は稷黍にして東南部の産地と雖も殆んど野生的に耕作するに過ぎず、其收
獲當時は之を「サミーズ」と稱し之を炙り臼に入れ搗きたるものを「チヲミ
イ」と云ふ、蒙古人は之を「モングバター」又は「ホレバター」と稱し奶子茶を
喫するときは茶碗に入れ數回茶を入れ替へて之を食す西北部に在つて貴重
の食品たり「ホレバター」は味ひ僅かに苦味を有するも香り良く少量にして満腹と
なるのみならず少量の水だに得れば何地にても用ゆることを得頗る輕便なる
を以て旅行等には必ず之を携ふ。

小麥粉又は干饅頭は王公又は富有者等上流一部に用ひらるゝに過ぎず、而し

て東南部各地に於ては滿漢人の如く或は饅頭或は餅に作り用ゆるも西北部に於ては主として饅頭として食す、烏珠穆沁部より西北各地の王府等にては皆珍客に饗する馳走として饅頭を供するの風あり、以上食料の調味品としては單に鹽を用ゆるに過ぎず。

庖厨に用ゆる器具及食器としては、一戸大抵一乃至二三個の鍋(二三升より水桶(移轉する游牧民は車に載せ)牛乳桶二三、臼、手杵、及略家族と同數の椀と箸等にして頗る簡單なり、猶蒙古人は平常肉切用小刀及箸を携帯し居ることは前述の如し。

蒙古人は一般に大食にして又數十時間の絶食に堪ゆ、是れ畢竟食を得ること困難なるより起れるものなり、故に蒙古人は旅客より金錢の贈與を受くるよりも食物を與らるゝか若くは物品を與らるゝを喜ぶ。

酒と煙草は多くの蒙古人の好む所にして十五六才以上の男子は蒙古小刀と共に

燃 料

に燧石を腰にす酒は乳酒の外滿漢人の輸入する高粱酒なり。

蒙古に於ける一般の燃料は獸糞なり、獸糞中最も良好なるものは羊及山羊の糞にして其の乾きたるものは容易に燃焼し火力極めて強し、蒙古人及西藏人は諸種の鐵器の製作にも亦此火力を用ゆ、鐵棒を火中に置けば忽ちにして白色を放つを以て其の火力を推すべし、羊糞に亞ぐものは牛糞にして又之に亞ぐものは馬糞なり駱駝の糞は燃焼悪しく最下等と目せらる。

獸糞は牧草地に在つては到る處發見せられ旅客も之を拾ひ以て燃料となすことを得、然れども濕潤せるものは勿論乾燥の度不十分なるものは燃焼困難なるが故に常に乾燥せる獸糞を貯存携行するの必要あり、戈壁地帯の牧草に乏しき地方に於ては獸糞を得ること困難なり、殊に沙漠地方に於て然りとす、然れども天の配劑は不可思議にして此の如き地方に於ては灌木生じ住民及び旅客之を伐採し又は其の根を掘り以て燃料に用ゆることを得せしむ、灌木は

通常若干の高さまで生長して枯死するものなるが故に燃料として極めて良好なり。

其他東部「ネルテンゴロ」の流域及西喇木倫上流地方は樺柏楊柳の密生せる箇所少なからざるを以て此等の地方に於ては樹皮を燃料となせり、又北方札賚特部方面及庫倫附近に至れば廣大なる森林を有し薪炭を得ること容易なり又開拓地方に於ては主として高粱稈を用ゆ。

ハ、住 居

蒙古人は牧畜を生業とするが故に毎戸廣大なる地域を有し之が爲め村落を集團することを許さず點々散居し其の生業を容易ならしむ、故に一村落は多きも二三十戸少なきは二三戸に過ぎず、而して此等の家屋は互に隔離し軒を接することなし、村落相互の距離も亦著るしく遠隔し近きも一二里遠きは數里又は數十里を隔つる所ありて其の寂寞全く想像外なり、故に蒙古には開放地

を除くの外全く市街地なし、家屋の構造は地勢及水草の豊否に由り大差あり由來蒙古人は均しく天幕式蒙古包に住したるものなるも、人文の發達に伴ひ漸次定住の家屋を構ふるものあるに至れるなり、而して現今家屋の構造により之れを區分すれば大略左の如し。

1. 興安嶺の東南部のものは殆んど皆移轉せず是れ水草共に潤沃なればなり、而して開拓地及其隣接地にある蒙民家屋は大抵滿漢式土塊又は煉瓦家屋に住し其周圍には土壁又は柳枝柵を繞らし家屋門前には經文を書きたる尺大の白又は赤布の小幡を樹て家の附近には家畜を圍ふべき土壁あり、家の前面又は側面には燃料たる牛糞を小丘の如く高く積上ぐ。

沙漠中興安嶺麓の住民は蒙古包に住し或は蒙古包に類する小土塊屋に住す、此等も常に移轉することなく周圍に樹枝等の圍ひを爲す、牛糞の堆積前者より小なり、小幡は多く屋上に掲げらる家の周圍に車輛あり。

2. 興安嶺西北部地方は天幕式蒙古包に住し春雪融解の頃より低平地に出て、水草を追ふて移轉す、而して家屋の周圍には常に車輛五六輛乃至十數輛を排列し常に移轉の準備を爲しあり、炎天にて草少なさ時は一所に牧養すること三四日にして順次他に轉ず、冬季結氷する頃に至り、丘阜の陽部を選びて定居す、之れは山上に草顯れ平地は雪を吹寄せ草を没し且雪を飲料に供するを以て低地にあるの必要なに依る、此等の地方に於ては家屋の周圍に何等の困定的設備なし、只冬季移るべき地には牛糞を集めあるに過ぎず。遊牧民は未だ全く往古草味の風を脱せず皆氈幕の内に起居し吾人の意義に於ける家屋を構成せず、其構造の如き甚だ粗悪なれども能く寒暑風雨を防護するに足り且つ解體携行に便なるが故に水草を逐ふて四方に流寓する爲めには最も便利なるものなりとす之を蒙古包と云ふ、大小數種あるも普通高さ約十三四尺下部は高さ約四尺中徑は家の大小により七八尺乃至十八八尺の圓筒を

爲し此圓筒上に傘形の屋蓋を載す、圓筒部の骨は徑一寸内外の柳條を四ツ目に編みし弧形編條を五個乃至六個連接したるものにして、組立分解共に容易なり、屋蓋の骨も亦柳條にて作られ、其形普通の傘骨に類し且つ自由に開閉せらる唯だ尖頭部に特別の框を附するのみ。斯組立てられし骨形の全部は羊毛を重ねて作れる毡子(毛氈)にて一重又は二重に包まれ、其墜落又は飛散を防ぐ爲め、駱駝の毛にて絢へる繩を以て外部より上下左右に相縛し尖頭部に限り毡子を游動し得る如くし必要に應じ繩にて開閉す、之れを開くときは光りを屋内に送り又烟りの逃出を容易にす恰も我國の家屋に於ける引窓の如し、小屋の入口は凡て南々東に面し高さ三尺五六寸幅約二尺五六寸の框を附し之れに二枚の小扉を裝す、又此小扉に代ゆるに絨壇製の垂幕を以てするものあり、或は之を併用するものあり、烏珠穆沁部及其以北の純遊牧地帯に於ては王公と雖猶ほ且つ此蒙古包に住す、唯

其異なる點は其形稍大なると、家屋の頂上に赤色の絨氈を用ゆるのみ。内部の配置は土間には中央部を除き毡子を敷き富たるものは正面に高坐を設け小屋に入りて左方は男子の居所にて來客は此處に占位するを禮とす、正面或は稍左斜めに當りて通常木櫃ありて其上に佛像又は活佛の寫眞を安置し、其前に佛器を並べ乳及肉を備へ之を聖壇とし、朝夕の禮拜缺くことなく、臥するに足を向くることを敢てせず、右方は即ち婦人の居所にして貴重品を納めたる大小の櫃、臺所道具、水桶及び食料品等あり、中央の空地には鐵製にて一尺餘の高さを有する五徳様のものを据へ、其中に獸糞を盛て火を作り或は炊爨し或は暖を取る、一個の小屋は漸く四五人の居住を與ふるに過ぎざるを以て富裕なる蒙古人は數個の小屋を有す、彼等の此内に於て寢に就かんとするときは土間に敷かれたる粗毛布を掃ひて之を敷布となし、自己の着用せる服を夜具となして所謂着のみ着の儘唯帶を解きしのみにて臥するなり、然

れども小屋内には一般支那流の惡臭なく唯羊肉及び乳の臭氣を感ずるのみ、蒙古人の不潔を顧慮せざるは漢人に優るも幸に住家は水草を追ふて常に轉徙し其都度小屋は清潔なる草地に立てらるゝを以て屋内は毡子に虱の繁殖するの外比較的清潔なり、而して此小屋の構成は普通婦女子の職掌にして彼等はよく其事に慣れ其、動作も極めて神速機敏なり。家具は僅に二三の箱又は戸棚、敷物及び鍋、茶碗、杓子、皮囊、水桶、木碗鐵架、火箸等あるのみ。夏季は各々疆界を按じ牧草繁茂の地を擇して移住するも移住の區域は略一定しありて隨所に轉居するものにあらず、之れ蒙古旗内の土地は大抵限界ありて某族は何地より何地に至り某臺吉は某地を所有せる等略一定せるにより移住に際しても亦其定まりたる區域内に於て良好なる水草の所在を求むるなり故に旗界を超へて牧畜するが如きは夫れ處罰せらるゝ規定あり、而して

彼等の斯く轉徙するは概ね夏季にありこれ一に良水の乏しきが爲めにして冬季は概ね丘陵の陽部を選んで居を定め猥に移轉することなし、而して冬季に用ゆる牛糞は凡て夏季に於て採集し豫め撰定し置ける冬季の居所附近に堆積し置くなり。

開拓地隣接の地方に到れば移轉式蒙古包は漸次固定式となり、遂に支那家屋と同様たるに至る、而して蒙古人は前記移轉式のもの「ウルグル」と云ひ固定式のもの「トグルクル」と云ふ、要するに「トグルクル」は「ウルグル」の進化したるものにして、其外觀に於て差異なきも、固定的構造にして其周囲は毡子に代ゆるに泥土を以てす、蒙古包より家屋に移る中間にして要するに支那家屋を構造するに材料乏しきを以て、已むなく此の如き雜種的のものとなりたるなり、昭烏達、哲里木の各盟に往々見る所なり。

更に開拓地區に近づけば家屋の結構は皆滿洲式土造若くは磚造にして唯其構

造の一般に宏壯ならざると室内に於ける窓牖及坑の構成に多小の相違を見るのみ、即ち滿人家屋は窓邊の一侧に坑を通じ時として之と對向して構成せられ、窓牖は概ね南面せる一侧に設けられ他側に開設するは稀なり然るに蒙古家屋は必ず鉤形若くは凹字形の坑を有し窓の數稍々多く設けらるゝを常とす而して五六戸若くは十數戸の集團するを常とし三四戸を算するもの少なからず、奈曼、翁牛特、達賴罕、賓圖及博王旗等に於けるものは是れなり。

二、婚姻

蒙古の婚姻は滿漢人と同様早婚なり十六歳以上の男子にして有妻ならざるもの少なし、概して婦人は男子より二三歳若くは四五歳年長なり、婚姻は當事者男女の間に知るなく、父母と媒介者によりて決せらるゝこと支那本部地方と異らず、而して通常女家よりは何物をも贈らず只男家より女家に贈物するのみ、其婚事の約束は賣買的なる故に男家より贈る物品は畢竟女を買ふ爲め

の代金たるが如し、約束成るや女の父親近のものと共に男の家を訪ひ小屋に入るや佛壇の前に拜伏し佛前に羊頭、乳、絹布等を供ふ、次に男の家より供する食膳の馳走となる、入輿の日は喇嘛によりて指定せらる、此日新郎の家より人を出して新婦を迎ふ、迎ひの者は新婦の家の入口に達して待つ、新婦の親戚朋友は戸前に出て圓形を作り女の出て行くを拒む如き態度を爲す、新婦は戸前に於て馬に乗せられ自己の家の周囲を三度廻りたる後疾驅新郎の家の方向に導かれ定め的小屋に着く、此小屋は新郎の父の家の近傍に豫め設けられたるものにして、此近隣の蒙古人及び双方の親戚朋友は婚宴に來り贈り物を爲す、次に新婦の仕度終るや先づ舅姑に紹介せられ佛像に禮拜す、此時喇嘛の讀經あり次ぎに新婦は竈に伏拜し終に新郎の父母並親戚に禮拜す、新郎も亦近傍の小屋に集まれる新婦の親戚一同へ同様の禮拜を爲し夫れより宴會となる、此宴は七八日も續くことありて脂肉、酒、煙草等は最も盛膳と

考らる、時としては宴席を壯重ならしむる爲め、樂師を招き歌はしむることあり。

離婚は何等の形式もなく極めて無雜作にして唯夫に於て離婚を望むときは妻を實家に追ひ返し單に離婚する旨を妻の兩親に申送れば足るのみ、女子よりするも亦然り、此場合に於ては唯婚家より贈る所の一部分を返還せざるを得ず、既に離婚せし以上は男女亦随意に再婚するを得べし。

ホ、葬儀

葬式の方法は地方によりて差異あるも概ね三種に別る、即ち一、棺に納めて埋葬するもの二、死屍を野に晒すもの三、火葬して其骨を靈地に納むるものは是れなり、第一の法は長城附近支那本部に接近せる地方に於ける蒙古人の習慣にして支那風に學びたるものなり、最も普通なるは第二の法にして死屍を山頂又は谷底に運び之を放置し禽獸の啄噬に任ずるにあり、是喇嘛教の教義

の然らしむる所ならんも畢竟遊牧地帯に在りては生活上の必要に迫られ轉々移住し定住なきより土着人の如く特に墓地を守り其追善供養を爲すに堪へざるの致す所ならん、然して放置後三日にして禽獸の食せるや否やを確め若し食せざるときは更に喇嘛を請じて讀經追吊す、此法は興安嶺の西北部及び東南部山脈地附近に行はる。

第三法は稍富たるもの、間に行はる、其茶毘に附せらるゝや喇嘛をして讀經せしめ全く焼け終るを待ち骨を拾ふて大喇嘛の許に持ち行く、大喇嘛は之を粉に碎き麥粉と共に練りて餅の如くに作り儀式を以て靈塔に收め或は之を奉じて五台山（山西省にあり）の靈地に納めしむ、凡て百日忌二百日忌に際しては喇嘛僧を請じて供養を行ふ。

歸化城附近にては屍を柩の上に置き馬をして之れを曳かしむ、屍若し墜落せば之を放置し、狼又は野禽の食ふに任せ、若し然らざれば之を火葬し其灰

を以て小なる人像を作り之を家中に保存すと云ふ。

へ、娯 樂

蒙古人の娯樂として數ふべきものは僅かに角力、唱歌、單一なる音樂及び競馬等あるのみ、角力は彼等の最も好む遊戲の一にして往古より之あり、現時北部蒙古に盛んなりと云ふ、而して鄂博（後に説明す）の祭日等に際すれば必ず此技を行ふ、力士は我國の柔術衣の如き皮製の短衣を着け長靴を穿ち東西より一人づゝ登場して力を角す、別に土俵の設なく倒れたるものを以て負けとなす、日常に於ても其部落に二三の少年相集りて力を角する光景は長城以内に見るを得ざる所にして一種の趣きを存す。樂器は胡弓、月琴等にして就中胡弓を多しとす、其音律太くして低く西歐のものに似たり、而して數人相集れば之を彈じ合唱す、大抵一村落に二三の樂器あり、蒙古歌謠の本色は男女の戀愛を意味し鄙猥に流るゝもの多し、鄂博祭日には特に儀式として競馬を

行ふ、其他狩獵放牧等の機會ある毎に之を行ふ、自己所有の馬は如何なる性質にして某地まで半日にて達すべし等不完全ながら標準を立て其遲速體力を知得するめ爲日々の乗用馬は絶へず牧馬群の中より取替へ勞働を均一にすると共に其性質に通曉し騎馬の調教をなす、狩獵には數旗連合のもの、一旗丈けのもの、其王公の催しにかゝるもの、數村連合のもの又は一村のもの自己丈けのもの等あり皆演武の一法なり、此狩獵及鄂博祭日等には互に良馬に騎乗するを名譽とて狩獵に在りては王公の面前に一番槍の功を奏せんとし、祭日に在つても先頭第一の名譽を得んと競ふ、之れが爲め自家所有の馬群中最良のものを選り壯者を騎手として以て之に赴く、かゝる競争に用ゆる馬は「チヨロヌメロ」(走馬)と稱し彼等の最も愛する所にして其數多からず、數百頭より成る馬群中にて眞の走馬は一二頭に過ぎずと云ふ、蒙古人は家居日常門前に馬を繋ぎ鞍を裝し牧畜用辨當等皆乘馬して之を辨ず、故に老幼婦女に至

るまで苟くも諸能を活動し得るものは能く馬に慣又能く之れを乗馭す、小兒五六歳に至れば父兄に伴はれ牧場に至り往復父兄に助けられて馬背に縋り十歳前後に至れば大抵獨立して巧みに乗馭し、裝鞍なき馬をも自由に乘るに至る、如斯彼等は幼少より自然的に馬と親しみ、之れを馭するの法を教へらる。

蒙古人の騎術は恐らく天下に冠たるべく、元朝の祖先が世界の大半を蹂躪し勇名を轟かしたるは全く此騎術の力なり、其騎するや上體を垂直にし膝下は後方へ少しく曲り如何なる運動を爲すも上體のみ動きて下體の位置は崩ることなく、全く馬匹と同體を爲す、而して上體を少しく前に屈するや馬は驀地疾駆す、又騎者は駆走中多く鏡上に直立し鞍に腰を置くことなく終日馬背にあるも疲勞の態なし、馬を下れば活氣を失して動作鈍さも騎乗せば忽ち輕捷となり疾駆して數十里の行程も尙隣地へ行くが如き概あり、されば距離の

觀念は他國人に比し極はめて短く邦人旅行者が某地への距離を問へるに「門前」なりと答へしかば定めし一二丁なるべしと思へるに後其距離の二里餘なることを知れりと、蒙古人が距離の觀念は概ね此の如し、而して距離を知れる蒙古人は極はめて少なく「ヘデホロベーニ」「ヘデカチラベーニ」(何里てすか)の間に對し正確なる答を得んことは覺束なし之れ蒙古人は距離を知るの必要なければなり、而して彼等の答ふる距離は、大概實距離よりも近きに失す。

蒙古人は馬ありて始めて活潑の動作を爲し得るのみ、若し歩行せしめんか水を離れし魚の如く全く能力なし即ち歩度は重く不作法にして脚は兩側に開き上體は前方へ傾き病後の人の歩行に彷彿たり。婦人も亦乘馬に關しては男子と同様の教育を受くるを以て、其技術毫も男子に劣らず但し乘馬するは旅行の際又は男子に代り戶外の業務に服する時のみ

に限り平常は騎乗すること少なし、然れども東南部開拓地隣接の地に於ては漸次柔弱に流れ殆んど婦人の乘馬するを見ざるに至り喀喇沁土默特等の地方にて若し偶々乘馬するときは驢馬を用ひ、小鞍上蒲團を布き男子其跡より鞭を以て附隨する等已に固有の習俗を脱却せるあり、眞に蒙古の本領を有する勇婦は、興安嶺山脈東南側より其の西北部地方に於て始めて之れを目撃するを得べし。

ホ、禮式

公務を取扱ふときは定めの官帽を冠するを以て禮式とす、挨拶のときは嗅煙草を勧めて互に交換し後用件に移る。

室内に於て王公に對するときは冠帽のまゝ其侍從に導かれ居室に至り入口に於て一度敬禮し更に數歩の地點近付き右膝を屈折し左膝を立て、最敬禮をなし報告上陳を爲し再び敬禮して去る、普通王公に面謁を許さるゝは四品官以

上なり、室外に於て民公に召さるゝときも亦同一の姿勢にて數歩を隔て跪座して言上し又は命を拜す、總て品級なきものは王公に近寄るを得ず王以下の上官に對する下級者の態度亦略同じ。

外來者車輛又は乘馬にて蒙古包の門前に來るときは下車馬せざる前に聲を發し家人を呼び犬の監視を乞ふ、家人の聲に應じて出づれば下車馬し馬を定規の馬繫城（蒙古は貧富共に毎戸必ず數頭乃至數十）に繫ぎ家人の案内に由り入口に近づき馬鞭を入口に置き門戸を入り「モンドー」又は「アモルヨウ」に御機嫌よろしうの意」と挨拶し入口より向つて左方に着座し腰袋より嗅煙草入（香の一種にして鼻に嗅ぐ惡臭を防ぐものなり）を出し左手に持ち左肩を下けて之を主人に進むれば主人も同じく嗅煙草入を出し來客に渡し互に鼻の下に當て嗅ぐ眞似を爲し「クリストモンド」（家内無事なりや）「アトセヘンニ」（馬群は良好なりや）等數語を交換し語る間に嗅煙草入を互に元に返却し來客は次

ぎに主人の妻兄弟子供に至るまで次第々々に同様に嗅煙草を渡して挨拶す、最後に先來の客あれば知人と否とに拘はらず之にも同様の挨拶を爲し徐に用件を談じながら來客は「テーベニー」（煙管はあるか）又は「タモ」（煙草）と略稱して右手を出せば主人煙管を渡し之に自己の煙草を詰め火を付て吸ひ其吸ひ口を煙草入の袋にて拭き右手に持ち吸口を先きに向け右肩を下げて之を主人に渡す主人も亦同様に來客の煙管に自己の煙草を詰め之を來客に渡す、其仕方來客と同一なり來客は如此室内のものに一々之を行ふ、其中主婦は來客の爲めに茶を暖め奶皮子又は奶豆腐を勧め長座の客なれば食事の用意を爲して之を勧む、而して用を了はり辭し去るときにも亦嗅煙草入を呈するを正式とすれども知人なるときは之を略す、而して來客の去るときは主人其他家内中之を室外に送り出て馬又は車に乗るまで見送るを常とす、茶及煙草は談話中常に飲み長座するの風あり、右は對等の場合なれども、主人より上位の

人來るときは主人自己の座を譲り正座に就かしめ下位の人なれば來客の方主人に對し一層丁寧なるの差あり蒙古包に於ては入口に對する向席を上位とし其右方を婦人席とし左方を客席とするを普通とす。

支那家屋の場合も禮に於て異なるなきも來客は坑(座席にして土間より約二尺位高く作)又は椅子に腰を掛け或は席上に座す然れども脱靴することなし。

蒙古にては我國の如く婦人も來客の席に來り主人と共に之を待つ、其禮儀は内蒙古各旗は概ね皆兩膝を屈し踵に體の重みを托し腿部を平にして兩手を腿部に上げ掌を下にして重ね頭を下るなり、外蒙古車臣汗部地方にては婦女は直立のまゝ兩手を均しく前に出し掌を上にし來客は之に掌を觸るゝのみ、恰も握手に近きものなれども、其の法は指を伸ばせるまゝにして握ることなし。

王公其他長上に逢ふ時は僅に道を避け下車下馬して禮をなす、其所要なきと

きは通過を待ちて又乗馬して行進を續け同等のものなれば互に下車馬す、休憩するときは嗅煙草、煙草の交換をなし急ぐときは互に口上を述べ上車又乗馬して續行す、途中に所要の人に逢ひたる時は先づ口上の挨拶をなし嗅煙草を互に交換し談話を始む、他旗又は滿漢人外人等と逢遇せば何人にも必ず近寄つて挨拶し何れより何れに行くや何用を帶ぶるや等の要件を問ひ確かめしむる風あり、但大勢なるとさは恐れて近付かず。

チ、日 常 行 事

蒙古人日常行事の大略は左の如し。

1. 毎朝起きたる後各自茶碗に少量の水を取り口を漱ぎ再び其漱ぎたる水を用ひ顔を洗ふ。
2. 家畜を放牧す。
3. 屢々喫茶す。

4. 日中家畜に水を興ふ（川又は湖の邊に住むものは自由に家畜の飲むに任す）。

5. 家畜を連れ歸る

6. 搾乳

7. 夕食

8. 就寢

其他不時に寺院又は王公府へ備役に徴せらるゝことあり。

蒙古人は日常此の如き單調なる生活を繰り返しつゝあるを以て、特に休日なるものなきも、滿漢人の例に倣ひ一年中新年及び陰曆三月三日、五月五日、七月十五日、八月十五日、九月九日は所謂五節句と唱し居れり、其他日を期して祖先の祭禮を行ひ喇嘛を招じて一家の周圍を清淨にすることあり、鄂博の祭禮には部落民各自野外に集團し歡樂して日を送ることあり、其他早魃、

水災等に際して其の禍ひを被はんが爲め、又は王公の繼嗣の乏しき場合等は其祈禱の意味を以て佛體を埋めて新たに鄂博を立つることあり。

リ、旅客ノ接待

前述の如く蒙古人は途上又は室内に於て他旗人或は滿漢人に逢へば問查的に來意を問ひ其言の如何を次々に傳ふる風あり、又外人等の來りたることは道路の遠きをも厭はずして直に馬を驅り所管佐領の許（佐領の説明は）に至り何日何様の旅客幾人何方に向ひ何物を携帶し行けりと報告し、其王府に報すべきことは佐領より人を派して之を報ず、其他近隣部落に於ける事件の新たに耳に入るあれば互に相報じ相傳へ忽ち流布して其迅速なること恰も電信を使用するが如し。

旅客にして官の保護あるもの即ち護衛又は官の興ふる道案内を伴ふものは其の取扱甚だ丁寧にして之に反し孤獨旅行者又は官の保護なきものに對して

は一切無頓着なり、故に旅行者は先づ其主宰者の所在地に到り保護を請ふを尤も便とす、官の保護ある旅行者は案内又は護衛兵の教導に依り隨意に隨所に立寄り前記せる彼等の食品の何物にても徴發賣收することを得、而して蒙民等は王府の命なれば何事にても拒む事なく喜んで之に應じ、報酬の如きは與へらるれば取り與へられざるも不平を言ふことなし、又斯る旅行者に對しては略一定の作法あり護衛者又は案内者より宿泊の通知をなすときは「タラカ」(屯長)は宿舍を割當て、其村内より羊其他所要品一切を集め村民を指揮して諸事不自由なき様奔走盡力す、客到着すれば先づ遠來の勞を犒ひ茶を出し村民交互挨拶に出で時至れば羊の料理せしものを進む、羊の料理は四肢及臟腑等を別個とし其全體と頭とを粗末なる木製の盆に載せ恭しく一禮し主人役たる屯長は僻遠の地進むべきものなきも云々と叮嚀に挨拶を述べ了りて自己又は配下をして小刀を以て耳に刃を入れ兩肩の「ロオス」肉の所を切り

頭を下げ小刀を横に置き自由に食せよと勸む、正客自ら小刀を取らざれば配下をして主客に切て勸めしむ、隨伴のものは四肢臟腑等の部分を別の容器に盛て出す、而して正客之を口にせざる間は誰も肉に手を觸れざれども正客一刀を下せば隨伴者村内のもの總掛にて忽ちにして殘骨のみに變ず、而して正客の前にあるものは之を取り下げ飯を出だすべきや否やを尋ね、正客之を求めれば取下げたる羊肉の一部を入れ「ホレバタ」又は小麦粉を以て初め羊肉を煮たる汁にて粥様のものを作りて進む、食事了れば又談話を始め翌日の旅行に要する人馬の準備を命じ屯長等は席を辭す、來客多くして一戸に入る能はざるときは數家に分ちて寢に就かしむ、翌朝に至れば屯長又來り茶を進め人馬の準備をなし出發を待つ、途中休憩するときも亦宿泊のときと略同じく唯食事を單一にするのみ又途中馬を要すれば何人の馬たるを問はず王命と稱して徴發するが故に一も不自由あることなし。

單獨旅行者即ち官の保護なきものは何れに行くも宿泊を肯せず、或は病氣に或は佛事に托し辭退するを常とす、偶々宿泊を許すも親切を盡すことは稀なり、甚たしきは牛乳を乞ふも與へざることあり門前に野宿しある人が水を汲むために之を厭ふものあり。

又、衛生

蒙古人には衛生なる感念なく人生の優勝劣敗は自然の儘に演出せらる、されば氣候と病魔に對抗し得るが如き壯者は生存し然らざるものは凡て斃る就中小兒の死亡率は大なるもの、如く、羸弱者は夭折し残れるは最も強壯なる者に限れるが故に現在の蒙古人は極めて強健なるもの、みにして其身體は鐵の如く猛烈なる寒氣も之を犯すなく連日の勞役更に疲憊を覺えず蒙古を旅行する者の常に驚く所は晩夏既に冷氣を催せる頃小兒の赤裸々となりて遠く遊び親たるもの之に衣を與んとせざる事なり、強者生存の理は勿論なれども斯く

くして幼少の頃より身體鍛錬し抵抗力を増長せしむることも亦蒙古人をして強健たらしむる一因たるや明かなり。

蒙古人は醫藥を用ひざるにあらず、又餘り醫道を解せざるにあらず喇嘛教は夙に醫術を攻究し譬へ草根木皮とは云へ大いに發達せるところあり、其醫學校とも謂ふべきものは現に西寧附近の塔爾寺（五臺山）にあり、年々此處に赴きて醫術を學ぶもの少なしとせず、畢竟布教に伴ふ仁術として之を喇嘛に修めしめたるも後世宗教の腐敗と共に漸次諸種の弊害を生ずるに至れり、即ち病氣を凡て惡魔の作用とし惡魔驅除の爲めに祈禱を行ひ以て過大の報酬を望む如きは是れなり、されば富者は喇嘛の來診を得るも貧者は之を得難きを常とす。

蒙古地方に於ける害虫は滿洲地方と同じく不潔の特産物たる蠅、蚊、床虫及び虱、蚤の類なり、蚊は概して其數多からざるを以て敢て安眠を妨害するに

至らず、床蟲は土造家屋に於て屢々發見せしも之又其數多からず、又蠅、虱、蚤は到る處に存在す茲に奇なる現象は遊牧地帯に於ては家畜の數多なる自然の結果として蠅の發生夥多なるべしと豫想せらるゝも事實は寧ろ之に反すること是なり、畢竟家畜は日出と共に人家の周圍を離れて放牧せらるゝを以て蠅群亦之に跟随して家居に遠ざかるに因るべきも其然る原因は一般に土地乾燥し地表を覆ふに短草を以てし人家少き爲め害虫發生の基因少なきが致す所なり、傳染病の起らざるも亦是に外ならず。

蒙古包の内には偶々牛羊體に寄生する虱の類又は稀に床虫のあることあれども支那家屋に比し遙かに少し、蚊虻は多く谿谷の小流に存在し蛇は各地共少なく其他の毒虫は至つて稀なり飲料水は一般に天燃水を用ゆ、張家口庫倫間の官道各驛及開拓地方に在つては概ね井戸を有し飲料水を得ること容易なり而して官道降近の井戸は水脈の近き所に之を設けらるゝが故に概して淺く水

面より平地まで五六尺を普通とす、水質は概ね良好なり、又東部鄭家屯洮南附近に於ても到る處井戸を用ゆるを得べし、此地方は水質多くは不良にして曹達を含めり。

遊牧地に於ては井戸と溜水を混用す、然れども其所在は多く遠隔して時々一日乃至二日行程にして始めて水を得ることあり、故にかゝる地方にては村落を縫ふて迂回して旅行するを便とす然らざれば水を携行せざるべからず。井戸の構造は甚だ不完全にして其開口は僅かに丸太を横へて井桁となし又樹枝束柴若しくは編條を被覆して崩壊を防ぐに過ぎず、其側壁は自然土の儘なるを以て汚水は絶へず浸透し且つ開口は直に地平に接するを以て汚物と塵埃とは常に流下混入し且つ其鑿堀の度深からず、又浚深せざるを以て井底には泥土堆積し忽ち混濁するを常とす故に飲用に際しては必ず先づ之を清澄にして後煮沸するを要す、湖沼水流等は一見甚だ清澄にして掬すべき如きも其の

附近は實に家畜の集合所にして糞尿を混入するを普通とす、水質は一般に多少の鹽分を含み且つ少しく混濁す、水量又豊富ならざるを以て多數人員の旅行には特に豫め設備をなすにあらざれば通行困難なり、燃料と飲料水とは蒙古を行くもの、爲め最も必要にして旅客は常に此二者に心を勞せざるはなし、就中飲料水に於て然りとす、官道を行くものは驛站到て之を供せらるゝも其他の道路を取るものは常に飲用水を求めて前進し其野宿は水の所在に依り決せらるゝを常とす、而して此水の所在は土人若しくは數回の經驗あるものにあらざれば之を知り難きが故に蒙古に行くものは必ず此の如き嚮導者を雇用同伴するを要す、旅客は水桶を携行するを普通とす、之れ獨り無水の地を行くとき必要あるのみならず、水の爲めに野宿を制限せられざると、良水に出會するとき之れを汲み貯はふるの便あるとの爲めなり、蒙古にて普通に用ひらるゝ水桶は、高さ約一尺二三寸の小判形桶にして水量約一斗を容る

べし。

ル、社會の狀態

蒙古の社會は極めて單純なり、其階級は大別して三となす王族、喇嘛及平民(蒙古人は之を黒人と云ふ)之なり。王族は元朝の後裔若しくは其子孫にして或は王公の爵を受けて各旗の酋長より或は臺吉以下の旗人に下り居るを以て其總數は極めて多く、一旗内の人口三萬を有する旗内には王族約三四千を數ふるものあり、即ち全人口十分の一以上を占むる割合なり此の如き多數の王族は其王族たる體面を保持し能はざるは明にして彼等の内には單に品級を有する外一物を有せざるもの多し。黒人には種々の種類あり、古代に於て蒙古人の奴隸たりしもの、子孫あり、或は漢滿人の土着せるものあり、其他種々の區別ありと雖も要するに王族若しくは喇嘛を除く外蒙古人は凡て黒人なり、此等蒙古人は政治上には各旗長の

下に隸屬し精神的には喇嘛に支配せられつゝ各自牧畜を事として今日猶ほ太古の風を存し簡易なる社會的生活を營みつゝあり、其生存競争の激甚ならざると私慾の觀念の比較的淡きこと等の爲め滿漢人に比し盜賊の類甚た少なく乞巧の如きは殊に稀なり、然れども旗内に於ける小盜の數々家畜掠奪することあり、此等盜賊は凡て他旗内のものにして平時は家居して生業を營みつゝあるに拘らず、一朝生計の困難を來したるときは走りて他旗内に入り家畜を掠奪し來るものにして本來の盜賊にあらず、稀には竊盜を事とするものあるも自己の旗内に於ては決して掠奪を働かず之れ容易に發見せらるゝの恐れあるが故なり。

黑龍江省の邊界に住する蒙古人は素倫人の禍害を蒙ること少なからず、素倫人は未開の種類にして殆ど竊盜を以て生活しつゝあり、殊に牛馬を偷むこと尤も巧妙なり、彼等は平生多く山林の間に住し屢々部落に來りて家畜を奪取

すと云ふ。

由來滿蒙境界地域附近は馬賊の巢窟を以て稱せられ就中小庫倫及鄭家屯附近に於て著るし、蓋し該地域は滿洲の富源に近きと土地不毛錯雜にして潛匿に便なるとに由り出てゝは掠奪恣にし、一旦追討に遭へば巧みに踪跡を晦ますに適するを以て漸次滿洲馬賊官兵の耳目を避けて該方面に隱退したると該地方の開墾せらるゝと共に本來の生業を失ひたる蒙古人にして恒産なき無賴の徒は相率ひて匪徒に投ぜし結果なりとす、而も支那官憲の彼等に對する一定の主義方針なきと所置を誤りたる政策とは容易に掃蕩の効を奏し得ざるのみならず、寧ろ益々該方面に於ける匪類勢力を助成するの傾向あり、又西喇木倫河と上流沙漠地方にありては往々小數の團體をなせる流賊伏在して行人を劫かし又は所在の村落を掠むるものあり。

一、政 教
甲、行 政

蒙古の行政は從來之を官治と自治とに區分せられ、清朝の時代にありては新疆及西藏と齊しく理藩部の統轄に屬し、將軍都統大臣等の派遣官を置き以て各旗の自治を監督せしが、中華民國成立の後理藩部を廢し、之を代ゆるに蒙藏事務局を以てせるも、其蒙古に及ぼせる權力は清朝時代に比し更らに衰へたるの感あり、一九一一年十一月外蒙古獨立を宣言してより南犯の蒙古兵蒙支國境に迫るあり、次て翌一九一二年十一月の露支協約に依り外蒙古は單に支那の宗主權を保留するの外全く自治を認むることとなり、官治機關は全く破壊されたるを以て本章は専ら自治機關に就て説明することとせり。

イ、内 蒙 古 の 行 政 區 劃

内 蒙 古 に 在 り て は 其 部 落 の 酋 長 即 ち 一 札 薩 克 の 統 轄 する 部 分 を 旗 と し 旗 を 合 せて 盟 を 爲 す (其 部 と 稱 する は 同 姓 若 く は 同 族 を 表 は す の 名 稱 に して 行 政 區 分 を 意 味 せ ず) 而 して 各 旗 の 下 に 皆 若 干 の 佐 領 を 置 く 、 其 區 分 左 の 如 し
哲 里 木 盟 (四 部 十 旗)

科爾沁右翼中旗 (圖什業圖王旗)	佐領二十三
同 前旗 (札薩克圖王旗)	同 十六
同 同 後旗 (蘇鄂公旗)	同 十六
同 左翼中旗 (達賴罕王旗)	同 四十六
同 同 前旗 (賓圖王旗)	同 三
同 同 後旗 (博多勒噶臺略して博王旗)	同 三十二
杜爾伯特旗	同 三十五
札賚特旗	同 十六

郭爾羅斯前旗

同 後旗

卓索圖盟(二部五旗)

喀喇沁右翼旗

同 左翼旗

同 中旗

土默特右翼旗

同 左翼旗 (蒙古錦又は錦王旗と曰ふ)

昭烏達盟(八部十一旗)

敖漢旗

奈曼旗

同 二十三

同 三十四

佐領四十四

同 四十八

同 五十一

同 九十七

同 八十

附、喀爾喀(タンハラハ)佐領二

佐領五十五

同 五十

喀爾喀左翼旗(チヨウハラハ)

札魯特右翼旗

同 左翼旗

阿爾科爾沁旗

翁牛特右翼旗

同 左翼旗

巴林 右翼旗

同 左翼旗

克什克騰旗

錫林郭爾盟(五部十旗)

烏珠穆沁右翼旗

同 左翼旗

同 一

同 十六

同 十六

同 五十

同 二十五

同 三十八

同 二十六

同 十六

同 十

同 二十一

同 九

ハ、蒙古人に對する行政機關

蒙古各部落の行政を論ずるに當り旗と稱する區劃を以て其自治の基礎となすは何人も異論なき所なれど、直に其旗を以て一國家を爲せるものの如く考へ其會長即ち札薩克を目して王公の尊嚴を備ふるものとし、或は宮中府中等の語を用ゐて之を談ずるは甚だしく誇張に過ぎたり、其大なるものは廣袤百里の封土を有し、清朝宗室に齊しき榮爵を世襲し幾多の部民を統率するを以て宛然一王國の如く思惟せらるると雖、繭へつて仔細に之を觀察すれば、其廣大なる領土と稱するは殆んど是れ廣漠たる原野にして、其間に放牧せる畜類は僅かに其部民の劣等なる生活を維持するに止まり、更に餘裕貯蓄等の存することなく、地上又何等の價値を有する設備を見ず、偶々之あるものは外來移住者の有にあらざれば喇嘛の寺院のみ、故に其領土を統治する行政機關の如きも極めて簡易且つ粗雜にして到底國家的政治機關の尺度を以て律すべき

ものにあらず、其日常行はるゝ所は皆舊來の習慣を墓守するに止まり、札薩克の多くは暗愚にして改良進歩の意志に乏しく依然として帳幕内一牧長の状態を持続するのみ、其封爵は清朝が其初めに當り多數の漢民族に對抗する必要上其風習稍相類似せる蒙人と結托同盟の策を採り、之れが懷柔手段として或は公主を與へ或は爵號を賜ひたる遺習にして、其封爵に數等の差あれども其實權に於て何等の輕重あることなく均しく之れ札薩克たる一旗の會長に過ぎず、即ち一旗なるものは稍々大なる一家族の謂のみ、其首領が共同生活の牛耳を執るに止まり人民の之に服従するは族長的習慣にして決して政治的機能運用の結果にあらざることとは歴史に於て明かなり。

1、札薩克

内外蒙古共一旗の長として其の領内の人民を統治する王、公、台吉には札薩克の職を授け大抵は世襲なれども、後嗣なき場合等には閑散王の中より特に

簡任せらるることあり、王、公、台吉は皆元の後裔にして土默特及び喀喇沁全部は女婿重臣の後なり、共に古昔諸方に割據して各自一小版圖を有せる獨立の酋長なりしが清朝に至り内附歸屬せり、故に大體に於ては古來より分立せし領土の姿勢を存續し清朝も亦國初是等屬藩の援助を得たること少なからざりしを以て務めて懷柔の策を施し、封爵の如きも宗室と同じく親王以下貝勒、貝子、鎮國公、輔國公、等に分ちて各王公の子弟には一等より四等に至る台吉を授け又外蒙古の舊時汗號を有せしものには特に其爵を親王の上位に班す。

王公中札薩克の職にあらざるもの即ち封土を有せずして封爵のみを有するものあり、此等は閑散の二字を加へて札薩克の職にあるものと區別せり、而して閑散王公等は一旗内に二三人若くは四五人あり、達賴罕旗の如きは其數實に七人に達せり、此閑散王公等は其旗内に於て若干の土地及少數の臣僚を有

し貧富固より一ならず。

2、盟長、副盟長

盟の制度は戦時に當りて利害關係を同ふする各部落の聯合に起因せるもの、如し、而して各盟には盟長、副盟長各一人を置き、各旗間に生ずる重大事件を處理せしむ。盟長、副盟長の選任は清朝時代に在りては理藩部より候補者たるべき資格ある（年少者及病者を除く）盟内各旗の札薩克の名簿を呈し、其中年齡德望共に高きものを撰びて皇帝之を親任するを例とせり、故に盟長副盟長は旗長たる札薩克と異なり其職を世襲するものにあらず、從てて一種の名譽職の如く其職の爲めに何等の報酬を受くるの規定なし。

此の如く盟長副盟長は政府の任命に係ると雖其札薩克たる點に於ては旗長と同一なるを以て各省に於ける官廳に上下級を設けて統屬關係を保たしむるものと同じからず故に各旗間に於ける重大事件は盟長より旗長を會同し兩者

の合議を以て之を行はしむ。

盟長は毎三年各旗に通報して種々の議題を解決する爲め會合を行ふ、之れを會盟と名づく、然れども現今は殆んど行はれず。

3、旗内官吏

1、トラスクチー(協理臺吉)は札薩克を輔けて旗務を辨理す、旗の大小に依り二人乃至四人あり、平常は事務の繁閑に應じ一人若しくは數人輪番にて執務し大事あれば會同協議す。

2、チャハルチー(管旗章京)は通常一旗に一人を置く、盟長の任にある札薩克の旗下には二人を置くことを得、札薩克を補佐し、協理臺吉と協同して旗内庶務の長官として直接司獄其他一切の行政を掌る「チャハルチー」となる者は「メーリン」(梅倫)には和碩梅倫と地方梅倫との二様あり、甲は札薩克の府にありて「トスラクチー」又は「チャルハチー」の命を奉じて庶務

に従事し、乙は閑職に屬し或は和碩梅倫の老癡者或は功に由り其職銜のみを賜はりたるもの若しくは「チャラン」(札蘭)と同じく地方事務に従事するもの等あり、和碩梅倫は通常一旗二人又は三人にして地方梅倫は定數なし多くは旗の部屬より採用すれども稀には札薩克の血族たる臺吉等より採用することあり。

4、「チャラン」(札蘭)は主として兵務に任じ地方に在りて一定の地域を劃り兵丁を統理し「チャンチン」を監督するを以て任務とするも所要あるときは府内の事務に従事せしむ、平常府内には二三の札蘭を交代執務せしめあれども「メーリン」の如く和碩地方の區別なし、此職は臺吉或は部屬の人民中より選任す、管内に於ける事の重大なるものは隨時札薩克の許に報告して裁決を請はしめ、又毎年一回(多くは八九月)札薩克の所に至り前年度に於ける管内の状況を報告し並に次年の施政方針を承受するものとせり。

5、チャンキン（章京）は「チャラン」の下に在る小地方官にして直接民人を支配するの衝に當るものにして部屬民人より選任せられ其數一定せざれども常時三四名乃至五六名宛一箇月交代にて、府に在りて上官の命令傳達其他諸般の旗務に服す。

6、驍騎校は「コント」（坤都）と稱し「チャキン」の命を受け其支配する管轄区内の一部を分擔す猶ほ「チャンキン」の助役の如し。

7、ピシカンテ（筆帖式）は即ち書記にして上官の命を奉じ専ら公文書其他筆記冊簿の保管等を掌る、其人員も亦旗の大小に依り大差あれども普通二名乃至十名とす。

以上は主として旗務を取扱ふものにして、旗務衙門に於て執務し「チャハルチー」を除くの外皆毎月順次交代勤務せり、但し和碩梅倫は交代する所と然らざる所あり、而して旗務上重要な地位を占むるものは協理臺吉「チャハル

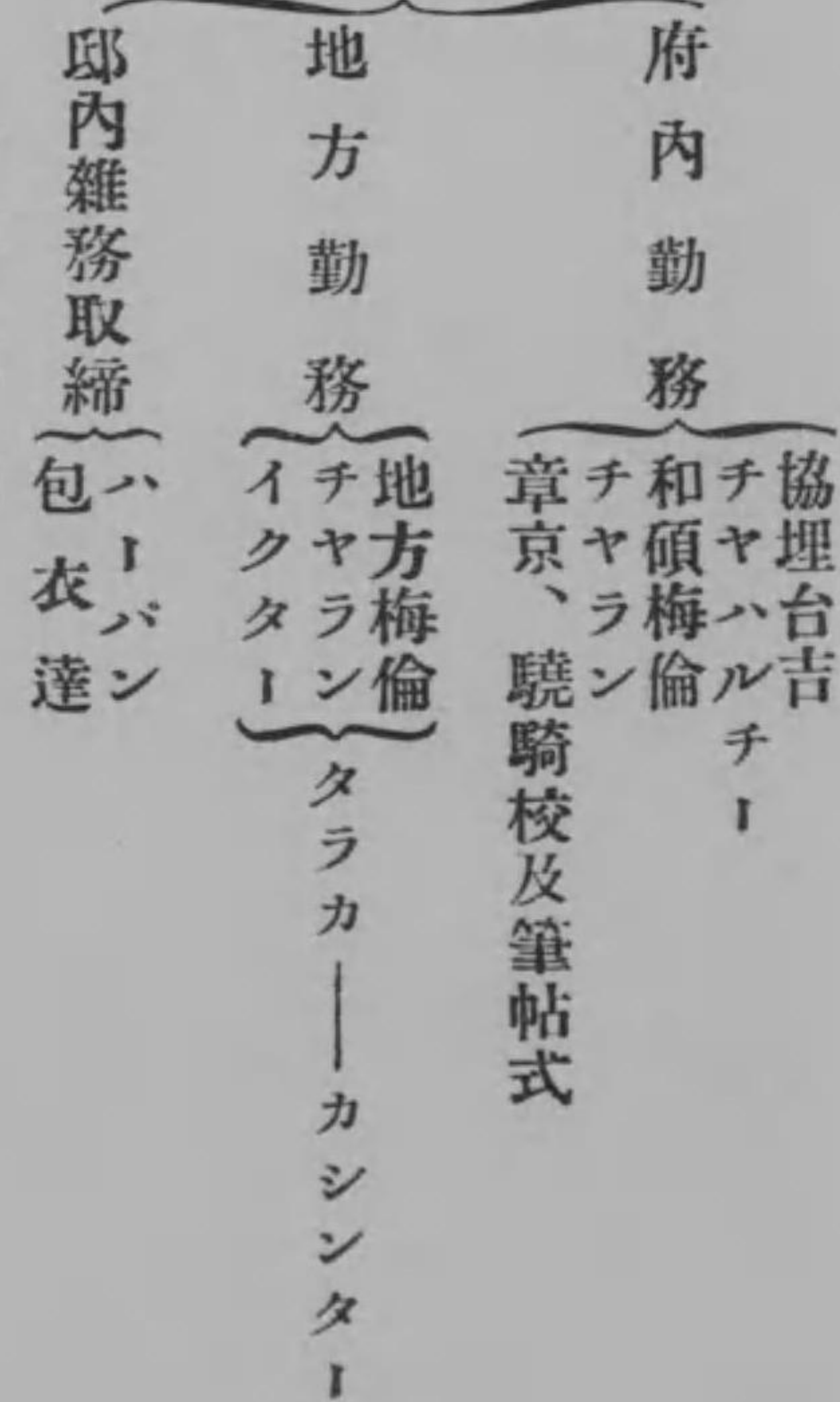
チー」及和碩梅倫なれども實際は時の札薩克の寵を有するものは其地位の如何に拘はらず、尤も權勢を有し庶務を専横しつゝあり。

其他旗務に預らずして専ら札薩克邸内の雜務に従事すること猶ほ家扶、家令の如きものに「ハーバン」及包衣達あり、邸内の取締及金錢物品の出納等を掌る。旗によりては「チャラン」又無職の臺吉をして此等の雜務を取扱はしむるものあり。

以上の外直接人民を管するものに「イクター」及「タラカ」の二あり。「イクター」とは大なる屯長の意なり、王府に遠隔せる地方の村屯を管し訴訟其他の一般行政に任ず。「タラカ」は屯長の意にして元來は十戸に一人を設けたる什長なりしも今は其數一定せず、其名稱の如きも屯達と改稱せるもの多し。其職掌としては「メーリン」「チャラン」等の命を奉じ所管各戸へ命令を傳達し稅物を課する等滿洲地方の郷約に類するものなり、尙ほ其下に「カシンタ

一と稱するものあり、屯内の雑務に任せり。
 以上の官僚は之を府内勤務、邸内勤務及地方勤務に分つことを得、而して前者は札薩克の邸又は府に出務し、後者は各々自己の家に在りて事に従ふものにして「ドスラクチー」以下の幕僚と雖、其の勤務日以外は全く自己の私宅に起臥し私業を営み事務の繁閑に依り毎月一回乃至數回の定日に札薩克の府に參集して旗内の事務を協議辨理し其他は緊急事件あれば參集して處理するのみにて平日は札薩克の府内に於ても儀衛に任ずる官僚の外政務等に從事し居るものなし。(府と曰ふは札薩克の事務所の意なり)
 以上旗内官吏の關係を表示すれば左の如し

王公
即ち札薩克



1、土地局

内蒙古東部各旗の境内に於ては、移住者の開墾盛に行はるるを以て土地局を設く、其規模の大小は一ならざるも皆な旗内開墾地の借地料を徴收し兼て耕地を整理するを以て目的とす。凡そ此借地料は各旗財源の骨子たるが故に頗る重要な機關なるも、其組織に至つては耕地の多寡に據り大小一ならず、一旗内に一箇所乃至數箇所完全なる獨立衙門を設くるものあり。又僅かに府

内の一部を以て事務室に充つるものあり。これが事務に任ずるものは通常蒙古人なれども稀には滿漢人を用ゆる所あり、而して協理臺吉又は「チャハルチ」之が總監督たり、其徴税の方法は時期を定めて屯長又は屯達をして取纏め徴收して土地局に上納せしむ。

5、營務處

營務處は主として馬賊を防禦するを目的として設立せられたるものにして其數甚だ少し、然れども各軍隊の形式を具へ若干武力を有す、之れが監督指揮者たるものは「ドステクチー」「チャハルチー」等なり。

ハ、移住漢民に對する行政機關

以上説述せる蒙古の自治機關は其權能移住漢民に及ばず、故に移民の民治に關しては各其境域に隣接せる支那本部各省行政官の管轄する所たり、即ち西部歸化城地方蒙古地内の移民は直隸都督の下にある宣化、承德、朝陽等の各府

に隸し、奉天省に接近せる蒙古地内の移民は奉天都督の下にある新民、昌圖、洮南等の各府に隸し、其他吉林都督の下にある長春、新城、等の各縣黑龍江省都督の下にある農安、大賚等の各縣皆其管下移民の民治を掌る、即ち是等移民の所在たる開拓地方は二系統の行政機關を有するものにして、蒙古王公に委せずして特に民事官を派し支那内地の行政を布けるなり、今其關係を列記すれば

- 1、土地は蒙古王公の所有なるを以て移民は初め所定の借地料を納め爾後地租を徴收せらる、其地租徴收官衙を土地局と稱し蒙古各旗の所管なり。
- 2、移民は蒙古人にあらざる故を以て支那政府派遣行政官の統治を受く。
- 3、開放地内に於ては往々蒙民の殘留居住するものもあるも此等は支那行政官の治下にあらずして依然蒙古王公の所管とす。
- 4、支那民官は蒙民を蒙古王公は移民を何れも互に管轄外とす但し訴訟等兩

方に渉るものは互に會商するを規定とするも多くは支那民官に於て辨理す。
左に其行政管區を示す

直隸都督所管左の如し

- 1、宣化縣
- 2、張北縣 太僕寺牧廠及察哈爾地方の移民を管す(舊張家口廳)
- 3、獨石縣 同 右 (舊獨石口廳)
- 4、多倫縣 御料牧地、察哈爾、克什克騰、阿羈核、阿巴哈納爾等の地方に散在せる移民を管す(舊多倫諾爾廳)
- 5、承德縣 平泉縣 豐寧縣 灤平縣 隆化縣 圍場縣
- 6、朝陽縣 土默特、敖漢、喀喇沁、奈曼、錫呼圖庫倫及喀爾喀左翼地方の民治を掌る

- 建昌縣 喀喇沁左翼旗地方を管區とす
- 建平縣 敖漢旗及喀喇沁左翼旗の一部を管區とす
- 阜新縣 錫呼圖庫倫及喀爾喀左翼地方を其管區とす
- 綏東縣 奈曼地方を管區とす
- 7、赤峰縣 翁牛特、巴林、阿爾科爾沁、札魯特の各旗を管區とす
- 開魯縣
- 林西縣

奉天都督所管左の如し

- 1、昌圖縣 科爾沁左翼移旗(博王旗)を管區とす
- 遼源縣(即ち鄭家屯)科爾沁左翼中旗(達賴罕旗)を管區とす
- 懷德縣(八家子)同 右
- 奉化縣(買賣街)同 右

康平縣 科爾沁左翼後旗(博王旗)を管區とす

2、洮南縣(元と薩鷄街茅土)科爾沁左翼前旗(札薩克圖旗)及右翼中旗(圖什業圖旗)を管區とす

靖安縣(白城子)科爾沁右翼旗(蘇鄂公旗)を管區とす

安廣縣(高家窩堡)同 右

鎮東縣(東叉干撓)同 右

開通縣(七井子)科爾沁右翼前旗(札薩克圖旗)を管區とす

醴泉縣(醴泉鎮)科爾沁右翼中旗(圖什業圖旗)を管區とす

3、彰武縣(橫道子)科爾沁左翼前旗(賓圖旗)を管區とす

法庫縣(法庫門)同 右

吉林都督の所管左の如し

長春縣(寬城子)郭爾羅斯前旗を管區とす

農安縣(龍安)同 右

長嶺縣(長嶺子)同 右

德惠縣 同 右

黑龍江省都督の所管左の如し

大賚縣(莫勒罕岡子)札賚特旗を管區とす

肇州縣(二臺站)郭爾羅斯後旗を管區とす

昌五縣 同 右

安達縣 爾杜伯特旗を管區とす

乙、教 育

支那は古來より孔孟の教を奉じて讀書を尊び従つて僻陬の村莊に至る迄不完全ながら書房(寺小屋)の制ありて教育機關の存在せるを認めしが蒙古に至

つては然らず、人民は水草を追ふて移住するを以て殆ど教育的設備を見ず、只各旗の王府に於て旗内官吏の子弟を教育せんが爲め教師を聘し文字を教ゆるものあると、旗内官吏にて自ら教師を撰びて子弟を教育するあるのみ、目的は成長後王府内に勤務して旗務を掌らしめんが爲めに於て一種官吏の養成法たり。

此等の子弟は八九歳の頃より入學し初めは五六ヶ月間單に蒙古の字母を教へ次に日常接觸せる事物の名詞其他單語を教授すること半歳、而して字母を暗んじ多少の詞を習得したる後は公文書を讀習せしめ傍ら古英雄に關する歌謠俚諺等を教へ又時として滿洲語を教授する所あるも光緒以來著しく衰退しつゝあり。

元代以後支那歴代の蒙古に對する政策は成るべく蒙古人の智能を開發せざるに力め殊に清初以來猥に蒙文に譯することを禁じたるを以て元朝以來今日に

至る間に於て蒙古語に記されたる書籍の主なるものは成吉思汗傳、蒙譯一切經、理藩院則例、蒙古律例、蒙古源流、蒙古里部王公表、及び其他聖諭廣訓三字經、小學つ如き三國志列國志等の小説及金剛經、心經等の經文等教化に關する數種類に止まり其の一般普通知識を與ふるものに至つては殆んど蒙文に譯されたるものを見ず、従つて蒙古人の認字比例は極めて僅少にして人口三百人に對し一人を算すれば則ち以て教育の進歩を語るに足るとなす、而して蒙古に於て比較的數字に縁ある喇嘛と雖も其の無學驚くべきものあり、彼等が日々數回の讀經は西藏文なるが故に、彼等の大多數は西藏文を知るものありと雖も却て蒙古文を解せざるもの多く漢字を知るものに至つては更らに稀なり。

斯の如く一般に教育の興らざるは從來蒙古に對する政策の然らしむる所なれども蒙古人の生活の事情も亦實に之れをして然らしむるものあり、即ち彼等

の多數は牧畜を以て業とし、而して牧畜は其性質上部落の大集團と兩立し難く従つて子弟を一所に集め教育する如きは頗る困難なり、加之交通の不便なる印刷術の發達せざるも亦一原因たり、然れども歌謠俚諺は比較的豊富にして稍聞くべきものあり。

以上の如く蒙古人は概して無學文育なるも近來有力者間に教育の必要を感知するもの漸次多きを加ふるに至れり、彼等は謂へらく漢人の日に月に移殖して之が爲め蒙古人が其利益を專斷する、事實は蒙古人の無識に由ること多しと、故に王府には支那の書房的學堂の設立を計畫するもの日に多く博王府喀喇沁王府の如きは新式の學堂を設立せり、然れども其普及に至るは前途遼遠と云はざるべからず、蓋し蒙古部落は各遠隔の地に點在するを以て日々子弟を通學せしむること難く、寄宿舎制度の學校にあらざれば之を設くるも其の目的を達する能はず、然れども寄宿舎の備はれる完全なる學校を設くる如き

は今日蒙古各王の財政を以て之に耐へ得るもの殆んど幾ばくもなかるべし、且や人民猶未だ教育の必要を悟らざるを以て教育事業に多額の費用を投ずる如きは之を一般人民に望むべからず、故に今學校を設け寄宿舎を造るも其費用は王府若くは設立者に於て議擔せざるべからず、然るに今日の事情に於て王府の財政之を許さず、故に若し二三王府連合して一學校を設立するに至らば、東蒙古のみにては十數個所に完全なるものを見るを得べく而して徐々に一般人民の教育思想を養ひ他の行政機關の整頓と歲月を積んで其普及發達を謀るより外策なかるべし。

東部蒙古特に興安嶺の東部に屬するものは近時開墾地の擴張と共に移住漢民と接すること多く、従つて漸次漢語を解するもの、數を増し稀には漢字に通ずるものあり、南方遼河以南に住する各民族は殆んど滿漢人と選ぶなき程度に達しある所なきにあらず、今左に東部蒙古に於て漢語を解する蒙古人の居

住地方を掲ぐ。

喀喇沁全部	土默特全部	翁牛特過半	敖漢奈曼の過半	喀爾
喀左翼、錫呼圖	庫倫	喇嘛旗牧過半	郭爾羅斯三分の一	杜
爾伯特、札賚特三分の一				

科爾沁東南部は全部の四部の一にして札魯特、阿爾科爾沁には漢語を解するもの殆んどなし。

丙 宗 教

蒙古に行はるゝ宗教は喇嘛教、回教、基督教の三種なるも、回教は主として西部蒙古に行はれ基督教は漢蒙邊境の地に於て極めて少數の間に信奉せらるゝに過ぎず、而して其の最も勢力あるものは唯一喇嘛教なり、喇嘛教に對する蒙古人の信念は頗る強烈にして婚葬祭吉凶禍福等に喇嘛教の關せ

ざるはなく喇嘛の有徳者に對しては之れを仰ぐこと神の如く宗教以外活佛以外に於ては帝王の權力をも認めざることあり、之れ往古世界の大半を震撼せしめたる所以にして又以て如何に喇嘛教が彼等に對し深遠なる感化力を與たるかを知るに足らん。

蒙古人中には往々喇嘛教以外一種巫者の如きものの信仰せらるゝあり、所謂薩滿なるものにして元來佛教の一派なりと稱するも今日に於ては著るしく變化し病氣を祈禱し及魔鬼に附して奇怪なる託宣を與ふる等純然たる巫者に異ならず、蓋し薩滿は東部西比利亞「ヤグート」人の奉ずる所にして其他主として滿洲に住せる索倫人、達湖爾人及滿洲人間に行はれしものなるが、漸次内蒙古に入りて一部蒙古人の信仰する處となりたるなり、然れども薩滿は宗教として體裁を有せず一種の迷信に過ぎず。

イ、喇 嘛 教